

# 石川県埋蔵文化財情報

## 第 25 号

巻頭図版（北陸新幹線関連発掘調査、加茂遺跡）

平成22年度上半期の発掘調査から .....調査部長 福島 正実…(1)

### 発掘調査略報

加茂遺跡（津幡町） .....	(2)
神田遺跡（金沢市） .....	(4)
高見スワノ遺跡（白山市） .....	(5)
高見遺跡（白山市） .....	(6)
米永ナデソオ遺跡（白山市） .....	(8)
北出遺跡（白山市） .....	(10)
宮保B跡（白山市） .....	(12)

平成22年度上半期の遺物整理作業 .....(14)

環日本海文化交流史研究集会の記録 .....(17)

はじめに .....	所長 三浦 純夫…(17)
近世肥前窯業史—16世紀末~18世紀— .....	中野 雄二…(18)
福岡県の陶磁器流通 .....	佐藤 浩司…(21)
山陰地方における近世陶磁器の流通 .....	佐伯 純也…(24)
福井県（福井城跡）の様相 .....	河村 健史…(27)
金沢城下町の様相—広坂遺跡出土品の変遷から— .....	庄田 知充…(30)
石川県における肥前陶磁器の流通 .....	加藤 克郎…(33)
富山県における肥前陶磁器の流通 .....	高梨 清志…(36)
新潟県における肥前陶磁器の流通 .....	伊藤 啓雄…(39)
東北日本海域の近世陶磁器 .....	長谷川 潤一…(42)
討論と展望 .....	中泉 絵美子・藤田 邦雄…(45)

2011年 5 月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

## 写真解説

### 北陸新幹線関連発掘調査

調査地と手取川扇状地（白山市北安田町上空から南南東方向）

平成22年度の事業は北陸新幹線関連の発掘調査が多くを占めた。写真は新幹線車両基地の出入りに隣接して設置される変電施設予定地付近で、JR線沿い向かって左から、成町遺跡、北安田南遺跡、高見遺跡がある。また、中央やや右の水路沿いに高見スワノ遺跡がある。

### 白山市高見遺跡 F1 区下層

高見遺跡では上層で古代～中世、下層で弥生～古代のそれぞれ集落跡が検出された。上下層の間には洪水砂層が認められたが、洪水砂の堆積が少ない地点に大形の上層遺構が造られた場合、多くの上層遺構が下層に達していた。この写真には古代前半期の竪穴住居や掘立柱建物とともに、上層で検出された中世遺構の残穴が写っている。



調査地と手取川扇状地（白山市北安田町上空から南南東方向）



白山市高見遺跡 F1 区下層

## 写真解説

### 加茂遺跡

#### F区3面調査区全景（南から）

遺跡北東域の丘陵端部に位置する調査区（F区）で、大規模な造成面に設置された13世紀前半頃の掘立柱建物1棟を検出した。柱間4×2間を超える総柱建物で、柱穴内には柱根が残存しているものも多く認められる。

#### F区4面須恵器窯完掘状況（東から）

丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いて築かれた7世紀前半の須恵器窯を検出した。窯体上部は中世以降の度重なる造成等により損壊しているが、壁面や床等は操業時の姿を比較的良好に残している。



F区3面調査区全景（南から）



F区4面須恵器窯完掘状況（東から）

# 平成22年度上半期の発掘調査から

調査部長 福島 正実

平成22年度は、石川県教育委員会から15件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの件数は、国土交通省が2件、鉄道・運輸支援機構が10件、最高裁判所が1件、県土木部が1件、県教育委員会事務局が1件である。本号では、平成22年4月から9月にかけて実施した7件の発掘調査の概要を紹介する。

津幡町加茂遺跡では河北縦断道路の整備に伴う発掘調査を行った。平成20年度調査で確認された須恵器窯を調査、7世紀前葉を主体とする須恵器が出土した。また、中世の掘立柱建物1棟を確認した。

北陸新幹線金沢・白山総合車両基地（仮称）間建設に伴う発掘調査は本年度がピークとなり、金沢市内2遺跡、白山市内8遺跡で計約45,000㎡の調査を実施した。金沢市神田遺跡は弥生時代から古墳時代の集落跡であり、前年度調査区隣接地での調査の結果、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての溝、土坑などを確認した。

白山市高見スワノ遺跡は弥生時代・古代から中世の集落跡で、弥生時代後期の土坑、7世紀末から8世紀初頭頃と見られる竪穴建物、中世の建物柱跡などを確認した。

同市高見遺跡は前年度の調査によって、弥生時代後期から室町時代の複合遺跡であり、上下2層の遺構面の存在が確認されていた。今年度の調査区でも中世を中心とした上層と、それ以前の時代の下層が存在し、奈良時代・平安時代では竪穴建物や掘立柱建物、中世では竪穴状遺構や掘立柱建物、区画溝などを確認した。

同市米永ナデソオ遺跡は平安時代の集落跡である。調査区中央付近で確認された川の両岸で掘立柱建物6棟、井戸、溝などを検出した。川からは10～11世紀頃の土師器などが多数出土したほか、白磁碗・皿、鉄製紡錘車・鎌、ガラス玉の出土が注目される。

同市北出遺跡は中世の集落跡であり、前年度調査区南側での調査の結果、区画溝と考えられるコの字状の溝、掘立柱建物、井戸を確認した。また、中世の集落より古い時期の水田を検出し、蹄跡と考えられる痕跡を確認した。

宮保B遺跡は中世の集落跡であり、総柱の掘立柱建物、石積を伴う竪穴状遺構、石組み井戸、土坑、溝などを検出した。遺物は12～14世紀を主体とする土師器・白磁・青磁・加賀焼・越前焼・珠洲焼などの土器・陶磁器、石製品、金属製品が出土した。前年度に調査した宮保館跡とは位置的にも近く、時期的にも重なることから、一体の遺跡と考えられる。

## 平成22年度発掘調査遺跡

No.	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	主な時代	関係機関	関係事業
1		大泊A遺跡	七尾市大泊町	1,100	縄文、古墳、古代、中世	国土交通省	能越自動車道七尾氷見道路
2		七尾城跡	七尾市古城町	970	中世	〃	〃
3	○	加茂遺跡	津幡町加茂	800	古墳、中世	石川県土木部	主要地方道高松津幡線(河北縦断道路)
4		丸の内7番遺跡	金沢市丸の内	6,820	近世	最高裁判所	名古屋高裁金沢支部・金沢地家簡裁庁舎
5		小立野ユミノマチ遺跡	金沢市小立野5丁目	3,195	〃	石川県教育委員会	県立金沢商業高校
6	○	神田遺跡	金沢市神田2丁目	1,040	弥生、古墳	鉄道・運輸機構	北陸新幹線
7		八日市D遺跡	金沢市八日市1丁目	440	奈良・平安、中世	〃	〃
8		横江D遺跡	白山市横江町	4,050	弥生、奈良・平安～近世	〃	〃
9		北安田南遺跡	白山市北安田町	3,400	弥生、古代、中世	〃	〃
10	○	高見遺跡	〃	6,160	弥生～中世	〃	〃
11	○	高見スワノ遺跡	〃	720	弥生、古代、中世	〃	〃
12		道村B遺跡	白山市宮丸町	16,420	弥生～古代	〃	〃
13	○	米永ナデソオ遺跡	白山市米永町	1,400	平安	〃	〃
14	○	北出遺跡	〃	3,400	中世	〃	〃
15	○	宮保B遺跡	白山市宮保町	8,200	〃	〃	〃
	計	15件(本号未掲載8遺跡は次号で掲載予定)		58,115			

## か も 加 茂 遺 跡

所在地 河北郡津幡町加茂地内

調査面積 800㎡

調査期間 平成22年6月22日～同年9月17日

調査担当 林 大智 林 亮太



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/2,500)

### 調査成果の要点

- ・切土を主体とする大規模な造成面に設置された中世（13世紀前半頃）の堀立柱建物1棟を確認した。
- ・丘陵斜面に設置された7世紀前半頃の須恵器窯を確認し、その焼成部、前庭部及び窯体前面からは須恵器が出土した。
- ・遺物は須恵器、土師器、青磁、木製鋤、木製箸、建築部材などが出土した。

加茂遺跡は河北潟東岸の丘陵端部に位置する。調査原因は主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）に係るものである。

平成20年度に発掘調査を行ったF区1面、2面からは近世～中世の遺構が確認されており、今年度はその下層に存在する遺構面（3面、4面）を対象に発掘調査を行った。その結果、7世紀前半頃の須恵器窯と中世の集落跡を確認した。

須恵器窯は丘陵斜面に設置され、窯体の上部は土砂崩落や後世の削平などにより損壊しているが、比較的保存状態は良好である。焼成部上方床面には、置台を設置するための窪みが規則的に確認され、焼成部下方床面には、置台として使用されたと考えられる礫や須恵器片が転げ落ちた状態で見つかった。焼成部と焼成部の境では、焼成部壁面の絞り込みが強く、さらに天井部を低くすることで焼成部からの圧力を高めている。なお、焼成部と前庭部は上方から掘削が行われており、天井は構築材などを用いて築かれていた可能性が高い。全体的に被熱痕跡は弱く、使用頻度が低かったと考えられる。

焼成部、前庭部及び窯体前面からは、焼け歪んだ須恵器が出土している。なお、焼成部からの出土遺物は少量に留まる。

中世の集落跡では、切土を主体とする大規模な造成面に設置された堀立柱建物1棟を検出した。桁行4間×梁間2間以上の総柱建物で柱穴内には柱

根が残っているものが多い。建物の西側桁行沿いには溝が掘削されており、この溝や柱穴から出土した土師器、青磁により、建物の時期は13世紀半頃と判断される。

なお、拡張調査区東側は、古代末から中世前期頃に沼沢化していた可能性が高く、少量の土器片と共に、建築部材、木製鋤なども出土している。 (林 亮太)



3面 掘立柱建物完掘状況



3面 柱根



建築部材 出土状況



木製鋤 出土状況



4面 灰原



4面 須恵器窯完掘状況



## 神田遺跡

所在地 金沢市神田2丁目地内  
調査面積 1,040㎡

調査期間 平成22年4月13日～同年6月25日  
調査担当 荒木麻理子 稲葉浩一



遺跡位置図 (S=1/25,000)

### 調査成果の要点

- ・弥生時代後期後半～古墳時代前期頃の集落跡である。
- ・調査区南部で弥生時代後期後半から終末期の遺構、調査区北部で古墳時代前期の遺構が分布する傾向が見られた。

神田遺跡は金沢市街地を貫流する犀川の左岸に位置する。調査は北陸新幹線建設工事に係るもので、平成21・22年度の2カ年にわたって行われている。調査区はJR北陸線と県道が交差する神田陸橋西側の線路沿いに位置する。

前年度調査で、弥生時代終末期および古墳時代前期、古墳時代中期の遺構・遺物が確認されている。今年度調査区は前年度調査区の隣接地に当たり、その大部分で上・下水道等による攪

乱を受けていたため、遺構の残りは良好ではなかったが、前年度確認された溝等の遺構の続きのほか、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての溝、土坑、小穴などの遺構を検出するなど、集落の西への広がりを確認できた。遺構は調査区南部では弥生時代後期後半～終末期のもの、北部では主として古墳時代前期のものが分布する傾向が見られた。なお、調査区の北端では遺構密度が希薄になることから、集落の中心域から外れると推測される。以上のことから、集落が弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて、その位置を南から北へ移しながら継続的に営まれていたと考えられる。(荒木)



遺跡遠景



遺構完掘状況 (南から)

## 高見スワノ遺跡

所在地 白山市北安田町地内

調査面積 720㎡

調査期間 平成22年6月1日～同年7月9日

調査担当 浜崎悟司 中泉絵美子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・古代（7世紀後半～8世紀初頭）の竪穴住居2棟、溝、弥生時代後期の土坑を検出した。

高見スワノ遺跡は、JR松任駅の南西、白山市北安田町地内高見集落を流れる山島用水沿いに位置する。今回の発掘調査は北陸新幹線建設にともなう市道付替えを調査原因として実施された。高見スワノという遺跡名は明治時代まではこの地近辺に高見諏訪神社が所在したことによる通称スワノに由来する。現地は手取川扇状地扇央部で、地勢は南東から北西へと下がっている。高見集落をはさんだ西に約150mの地点では平成21・22年に高見遺跡の発掘調査も実施されている。

南北に細長い形の調査区は、現地を横断する農道によって三つに分かれ、南から順に1区・2区・3区とした。1区では溝等を検出したが遺構・遺物は希薄であり、3区は北半分が近世の河川により攪乱をうけていた。2区では、7世紀後半～8世紀初頭頃の竪穴住居2棟、土坑、溝等を検出した。竪穴住居SI01は一辺が約4.5mの方形で、床面で二つの柱穴と壁溝を検出した。遺物は須恵器（有台坏・かえりのある坏蓋等）、土師器、刀子等が出土している。竪穴住居SI02は一辺が約5mの方形で、須恵器・土師器が出土し、床面では貯蔵穴と壁溝を、南辺の東端ではカマドを検出した。2区中ほどに位置する土坑SK05では弥生時代末期の土器が出土した。

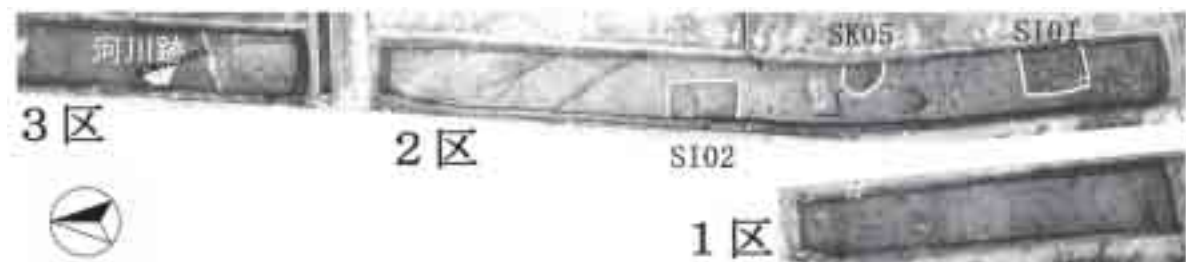
今回の調査区は東西幅が5m前後という細長い形であり、調査区内で検出した遺構は全体を検出できていないものが多い。集落地としては東西にもさらに広がりががあると推測される。  
(中泉絵美子)



SI01 (北から)



SI02 (北から)



調査区の概略

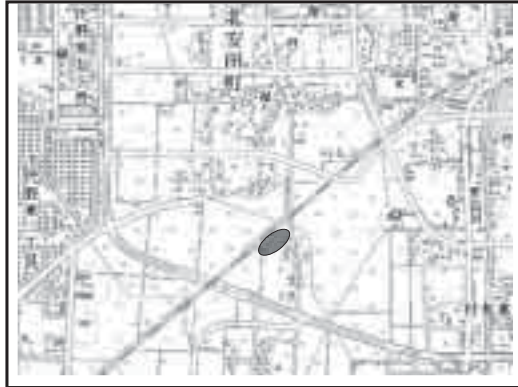
## たかみ 高見遺跡

所在地 白山市北安田町地内

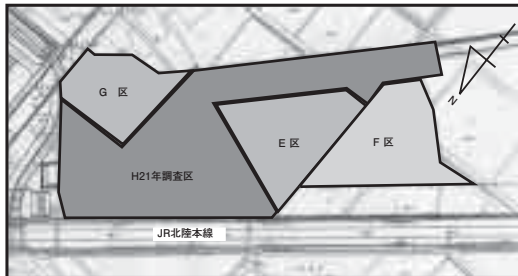
調査面積 6,160㎡

調査期間 平成22年4月13日～同年8月31日

調査担当 澤辺利明 加藤克郎 畑山智史



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図

### 調査成果の要点

- ・弥生時代後期～室町時代の複合遺跡を確認した。
- ・奈良・平安時代の竪穴建物、掘立柱建物、畝溝群等を確認した。
- ・中世の竪穴状遺構、掘立柱建物、区画溝等を確認した。
- ・焼骨や焼土、炭化物をともなった中世の竪穴状遺構を確認した。

高見遺跡は、JR松任駅から南西へ約1.5kmのJR北陸本線南側に位置する。

日本海へ向けて緩やかな傾斜がみられる手取川扇状地に遺跡は立地する。周囲には田園が広がり、その中を山島用水系の水路が流れ込む環境である。

調査は、北陸新幹線建設にともなうものであり、昨年度の調査区(A～E区)の隣接地にF・G区を新たに設定して行った。昨年の継続として、E区下層から調査を

行い、F、G区では上層が中世、下層が弥生～古代の遺構面を確認した。

下層遺構は、古代の竪穴建物12棟、掘立柱建物3棟以上を確認した。竪穴建物は1辺2～5mの方形又は長方形で、カマドや煙道、壁溝を一部で確認した。掘立柱建物は2×2間等を確認した。下層出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

上層遺構は、15世紀代が中心であり、竪穴状遺構を約25基、掘立柱建物を構成する多数の柱穴群と、それらを区画する溝を検出した。区画域は、東西の1辺が約30mあり、北方向へ広がることを確認した。一部の溝からは、16世紀代の越前焼の播鉢が出土している。上層出土遺物は、陶磁器、石臼や石鉢などの石製品、銅銭などの金属製品やモモの種子などの自然遺物が出土した。

なお調査区の南端部は、南西側に向かって、地形が低くなっており、また遺構や遺物の密度が低いことから、遺跡の縁辺部と考えられる。対して遺跡西側は、調査区の壁面に遺構を検出しており、線路の通る北西へ遺跡が伸びていることを確認した。

F区上層では、炭化物や焼土とともに焼骨が出土した15世紀の竪穴状遺構を1基確認しており、火葬に関連する遺構として注目できる。隣接する調査区では五輪塔の地輪が出土しており、昨年度の調査においても宝篋印塔の塔身も出土していることから、近接地に墓域があったことが推定される。これらの人骨は、当時の火葬を検討するための貴重な資料であると同時に、竪穴状遺構が内包する多様な性格の1つの事例である。

(畑山智史)



F区上層完掘状況（東上空から）



F区上層完掘状況（西から）



G区上層完掘状況（北から）



F区下層 SB1 完掘状況（北東から）



F区下層完掘状況（東から）



F区下層 SI1・2 完掘状況（南東から）



E区下層 SK8 地輪検出状況（南から）



F区下層 SD10越前焼播鉢出土状況（西から）

## よねなが 米永ナデソオ遺跡

所在地 白山市米永町地内  
調査面積 1,400㎡

調査期間 平成22年4月13日～同年6月24日  
調査担当 林 大智 林 亮太



遺跡位置図 (S=1/25,000)

### 調査成果の要点

- ・手取川扇状地上に営まれた平安時代後期の集落跡を確認した。
- ・総柱構造の掘立柱建物4棟以上、井戸2基、溝、小穴などの遺構を検出した。
- ・掘立柱建物のなかには、比較的大型の倉庫や四面庇を備え付けた建物も認められる。
- ・調査区中央付近の川跡からは、多数の土師器が出土すると共に、白磁、鉄製品、鍛冶関連資料などが定量出土している。

米永ナデソオ遺跡は、霊峰白山を源流とする県下最大規模の河川「手取川」によって形成された扇状地の扇中央部端寄りに位置する。また、遺跡は、時代の移り変わりと共に流れを変えてきた手取川旧流路が、扇状地内に作りだした細長い島状の微高地上（標高17m）に立地しており、周辺には北安田北遺跡、法仏遺跡、宮丸遺跡など、同様の微高地に立地する遺跡が多く存在し、扇状地内屈指の奈良・平安時代集落跡密集地として知られている。

近接地では、平成元年に石川県立埋蔵文化財センターが、県営ほ場整備事業一本地区に係る北出遺跡（奈良・平安時代、中世の集落跡）の発掘調査、平成2年には松任市教育委員会が、工場建設などに係る米永シキシロ遺跡（平安時代後期の集落跡）の発掘調査を実施している。今回は、北陸新幹線車両基地路盤工事などに係り、面積1,400㎡の発掘調査を実施した。

発掘調査の結果、平安時代後期の集落跡を検出した。集落跡は、緩やかに蛇行しながら南北方向に流れる川跡の兩岸に展開し、複数の掘立柱建物や井戸、溝、小穴などの遺構を検出した。

掘立柱建物は全て総柱構造で4棟以上を確認した。特筆すべき建物としては、桁行3間×梁間2間で大型の柱穴をもつ倉庫と考えられる建物や、桁行・梁間が3間四方で、四面に庇を備え付ける建物が見られる。なお、前者の周囲には、柱穴列が長方形に巡っており、塀の存在が推測される。また、掘立柱建物として認識できなかった小穴のなかにも、明瞭に柱痕跡が認められるものも多く、調査区内には更に多くの掘立柱建物が存在していた可能性が高い。これらの柱穴からは、土師皿、緑釉陶器、馬具の一部と考えられる鉄製鉸具などが出土している。

井戸は2基確認され、上記した大型の掘立柱建物と隣接する位置に設置されている。うち1基には、水溜めに径40cm程度の木製井戸側が設置されていた可能性が高い。

溝では調査区東側で南北方向に調査区を縦断するものが認められる。出土遺物が少ないため、詳細時期は不明であるが、類似する規模・方向の溝は調査区の北側約300mに位置する米永シキシロ遺跡で確認されており、今後、詳細な位置関係などの検討が必要となるだろう。

調査区中央付近にみられる川跡からは多数の土師器が出土した。また、共伴して白磁、鉄製品（鎌・紡錘車など）、フイゴ羽口や鍛冶滓などの鍛冶関連資料、ガラス玉が出土しており、この遺跡の性格を探る際に重要な資料となるものと思われる。

(林 大智)



調査区全景（南から）



掘立柱建物 作業状況(南から)



緑釉陶器 出土状況（東から）



井戸 完掘状況（西から）



川跡 遺物出土状況（南西から）

## きたで 北出遺跡

所在地 白山市米永町

調査期間 平成22年4月23日～同年9月8日

調査面積 3,400㎡

調査担当 端 猛 荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

### 調査成果の要点

- ・中世の屋敷地を区画するコの字状に巡る溝を検出、長辺は70mを測る。堀の可能性が高い。
- ・水田跡を検出し偶蹄目の足跡が連なるのを確認した。

北出遺跡は手取扇状地の扇端部に立地し、現在の標高は17m～18mを測り、西方へ緩やかに傾斜している。

発掘調査は北陸新幹線車両基地建設に伴うもので、平成21年度に引き続いての調査となった。

調査では中世の集落跡を確認した。調査区の北側、平成21年度調査5区では近代まで存続した河

道を検出したが、平成22年度調査ではその南岸を検出し、さらに複数ある流路の中で古いものは中世に遡ることを確認した。また、調査区のほぼ中央で屋敷地を区画するコの字状に巡る溝を検出した。溝は検出面で幅3～4m深さ1.2m前後、規模は長辺で70m程になる。溝からの遺物は少なく、埋土の堆積状況からも管理が行き届いた状態で機能していた様子が窺われる。区画内では井戸を1基、掘立柱建物を数棟確認した程度だが、館に関連する堀の可能性が高い。平成21年度調査1、2区で検出した浅い溝も方角や形状から堀の可能性が高く、仮に同時に機能していたならばかなりの規模となる。なお、白山宮の神主職を務めた上道氏系の米永氏の名が文献に見え、関連が注目される。

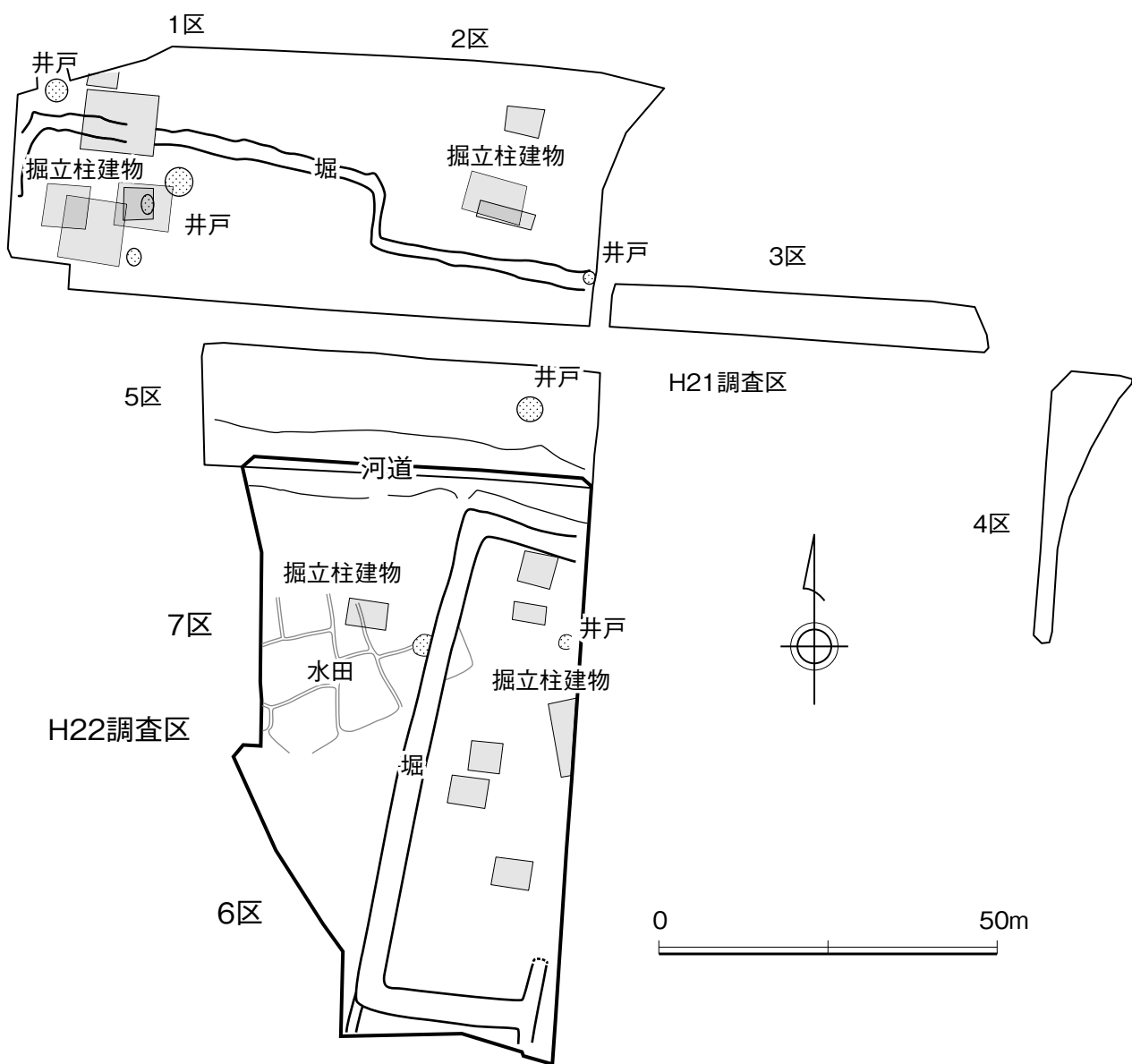
このほか、水田跡と考えられる区画を検出し、偶蹄目(牛?)の蹄の痕跡を水田面ほぼ全域で確認した。蹄跡も含め田面はやや粗い砂で埋まっており、洪水等により一気に埋まった可能性が高い。水田に伴う出土遺物はないが、弥生土器を包含する層を基盤にし、前述の中世の堀よりは古い。手取扇状地の再開発を考える上でもこの水田と館跡の関係は興味深い資料といえよう。(端 猛)



堀と屋敷地(北から)



堀の調査の様子



H21・H22調査区遺構配置模式図 (S=1/1,000)



調査区遠景 (東から)



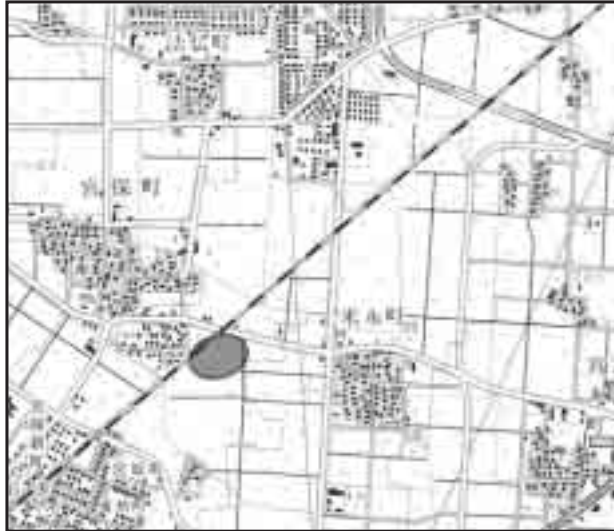
水田の様子 (上が南)



## みやほ 宮保B遺跡

所在地 白山市宮保町地内  
調査面積 8,200㎡

調査期間 平成22年4月13日～同年10月7日  
調査担当 澤辺利明 中屋克彦 谷内明央 空良寛  
北村啓悟 魚水環



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/500)

### 調査成果の要点

- ・12～14世紀を中心とする集落跡。
- ・竪穴状遺構、掘立柱建物、井戸、土坑、溝などを検出し、土師器、白磁・青磁・加賀焼・越前焼などの陶磁器、砥石・五輪塔などの石製品、漆器・箸などの木製品が出土した。

宮保B遺跡はJR松任駅から南西に約3kmの標高16m前後の手取川扇状地扇端部に立地する。発掘調査は北陸新幹線車両基地建設に伴うもので、平成21年度から実施している。第2次調査となる今回は8,200㎡を対象とし、西からB・C・D区に分割して調査を実施した。

B区では3×4間の総柱建物2棟(建替え)や竪穴状遺構4基などを確認した。竪穴状遺構の1基では、中央に曲物が設置されていた痕跡を確認しているが、その性格については不明である。

C区では2基の石組み井戸をはじめ、多くの竪穴状遺構、土坑、溝、ピットを確認した。石組み井戸の1基は、掘り方の径が5～6mを測るもので、深さは約2.3mであった。石組みはこの大きな掘り方の底から組み上げられてお

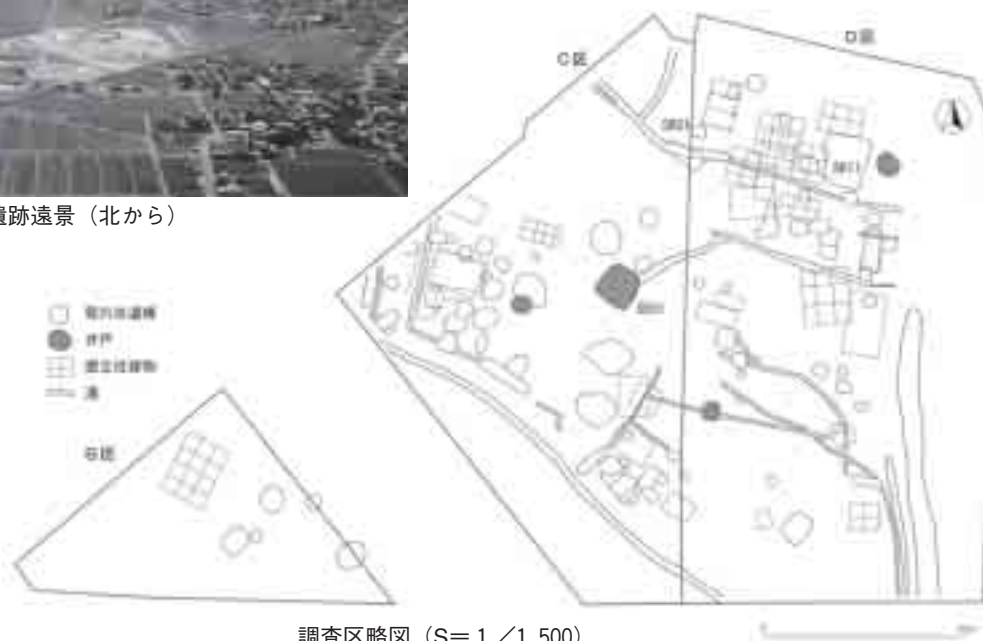
り、内径は1.5mであった。底近くから14世紀末頃の白磁の皿が出土している。この他、幅0.5～1mの溝をいくつか検出しており、区画溝であった可能性がある。

D区では竪穴状遺構、土坑、溝、ピットなど多数の遺構を確認した。竪穴状遺構には石積みを伴う大型のものがあり、堆積状況などから池のような水を溜めた遺構であったと推定される。底からは烏帽子が出土している。また、底に藁が敷き詰められた土坑からは、1.9×0.6mの大きな板が出土している。この他、調査区の東には遺跡の東端を画すると見られる幅約2m、深さ0.7～0.8mを測る南北方向の堀状溝を検出した。

竪穴状遺構は長軸2～3mの小規模のものは複数切り合い密集する傾向がある。一方、5m前後の大型のものはそれらからやや離れて単独で立地する傾向があるようである。また、掘立柱建物は小規模の竪穴状遺構が密集する付近に立地する傾向で、これらと井戸や土坑がセットとなり、いくつかのブロックを構成している様相がみられる。今後さらに検討を深め、集落構造の解明に努めたい。(中屋 克彦)



遺跡遠景（北から）



調査区略図 (S=1/1,500)



D区 SK11水溜遺構（北から）



D区 SK01藁敷き土坑（東から）



C区 SE01石組み井戸断ち割り状況（北から）



D区 SK11烏帽子出土状況

# 平成22年度上半期の遺物整理作業

## 国関係調査グループ

上半期は、古府・国分遺跡（七尾市・平成17年度調査）の記名・分類・接合から始まった。古代末から中世前半の遺跡ということで、遺物は須恵器、土師器、製塩土器、陶磁器、瓦塔、瓦等多様であった。特に、須恵器、土師器は破片の数が多く、接合はなかなか困難であった。また、破片の量の割には口縁から底部まで復元できる個体が少なく、胴部だけの瓶や壺、口縁だけの甕や坏といったものばかりになってしまい、やや消化不良の感が残る接合であった。須恵器、土師器以外では緑釉陶器が数多く出土しており、皿、椀、壺など器種も多様で、中には唾壺のような珍しいものもあった。瓦塔の一部（屋蓋部、軸部、相輪）は破片が小さすぎて瓦塔のどこの部分に当たるか見当がつかず、資料を見たり、調査員に質問したりして実測を行った。また、円面硯、須恵器の甕の破片を転用した猿面硯などあまりお目にかかれぬ遺物を実測し、種類、量とも上半期の中心になる整理であった。

続いて分校C（加賀市・平成19年度、平成20年度調査）の記名・分類・接合、実測、トレースをおこなった。土師皿、陶磁器などの他に燭台、石鉢、石製の硯、青銅製の花瓶があり、特に青銅製の花瓶は文様が非常に細かく、精巧で実測にはかなりの集中力を要した。木製品は井桁状に組まれていた井戸枠で、1mを優に超える長さの半截された丸太や杭、井戸の裏込め土から出土した黒塗りの椀を実測した。

次に、横江D遺跡・二日市イシバチ



遺跡（白山市・平成20年度調査）、二日市イシバチ遺跡（新幹線）（白山市・平成19年度、20年度、21年度調査）、三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群（七尾市・平成19年度調査）と規模の小さい遺跡を続けて調査した。

記録的な猛暑が終息に向かう頃、加茂遺跡（津幡町・平成16年度調査）の木器の実測に入った。棒状や板状の木製品が大半であったが、中には梯子、櫂もあった。

（小林多恵子）

### 県関係調査グループ

上半期は五歩市遺跡（北陸新幹線関連）（白山市、平成20年度・21年度調査）、畝田・寺中遺跡（金沢市、平成18年度調査）、興徳寺B遺跡（輪島市、平成21年度調査）、加茂遺跡（かほく市、平成19年度、平成20年度調査）、北安田南遺跡（白山市、平成21年度調査）の遺物整理作業を行った。五歩市遺跡では遺構が錯綜していると聞き、その流れを明確にする為の手がかりを探ろうと接合に臨んだ。実測では弥生の装飾器台が多く、条痕の深鉢が残りの良い状態で1点あった。続いて畝田・寺中遺跡では弥生から近世までの多様な土器や石器を実測した。半年で5件の作業であったが無事、終える事ができた。（小林直子）

遺物の洗浄は昨年度までに発掘調査を終えた遺跡について8月末まで実施し、それ以降は当該年度である平成22年度発掘調査分の遺物洗浄をおこなった。具体的には、丸の内7番遺跡で、近世遺跡の特性として大量の遺物出土が見込まれることから、まとまった遺物量を何回かに分けて洗浄する計画を立てたのである。

（伊藤雅文）



## 特定事業調査グループ

上半期は、元菊町遺跡（金沢市、平成19年度調査）、加茂遺跡（津幡町、平成16年度調査）、南新保E遺跡（金沢市、平成21年度調査）、古府・国分遺跡（七尾市、平成18年度調査）、末松廃寺（野々市町、平成21年度調査）、松山D遺跡（加賀市、平成19年度調査）の整理作業を行った。松山D遺跡に関しては、9月27日～10月15日の作業であったので、次号の情報誌でお知らせしたい。



元菊町遺跡は前々年度に記名・分類・接合作業を終え、前年度から引き続いての実測・トレース作業であった。近世の金沢城下町の一角ということで、陶磁器を主に、土師器、石製品、金属器などあり、特に磁器には焼き接ぎや漆接ぎが施されているものが多く、ものを大事に使っていた庶民の生活ぶりをうかがい知ることができた。



加茂遺跡は、465点の木製品の実測・トレース作業を行った。杭状、板状、さまざまだが、加工によるものか植物の根っこによるものか判別が難しい穴を持つ木製品が多数あり、頭を悩ませながらの実測となった。

南新保E遺跡は、縄文、弥生土器をはじめ、石鎌、打製石斧など石製品、井戸枠として使用されていた曲物、斉串など木製品の記名・分類・接合および実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。

古府・国分遺跡は須恵器、土師器、陶磁器、石製品の記名・分類・接合および実測・トレースを行った。今回、須恵器の胎土に関して注意深い観察を求められ、ルーペを片手に須恵器の断面に見える砂粒と格闘した。

末松廃寺は須恵器、土師器、陶磁器の記名・分類・接合および実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。

（西川 朗聖）

# 環日本海文化交流史研究集会の記録

## はじめに

(財)石川県埋蔵文化財センター所長 三浦 純夫

環日本海文化交流史研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで沿岸各地域と調査・研究を行い、交流をはかるものである。研究集会は、財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から「環日本海文化交流調査研究事業」の一環として実施しており、今年度が11回目の開催となった。

今年度のテーマは「近世日本海域の陶磁器流通－肥前陶磁から探る－」で、17世紀初頭に生産が開始された肥前陶磁について、生産と消費の最新情報を確認し、消費地における肥前陶磁の流通と組成、変遷等について報告、討議を行った。

生産地では、長崎県波佐見窯、石川県九谷窯の報告があり、消費地では北部九州、松江城下町・米子城下町を含む山陰地方、福井城下町、金沢城下町、八田中中村遺跡・谷内ブンガヤチ遺跡などの加賀・能登地域、富山城下町を含む富山県、新潟県、そして秋田県の様相が詳細に報告された。

各地域の報告により、肥前陶磁の生産と消費が概観できた。石川県では金沢城下町の資料の様相が明らかになり、今後城下町研究、陶磁器研究に少なからず寄与するものと思われる。地域の資料を集成・検討し、報告された長崎県の中野雄二、福岡県の佐藤浩司、鳥取県の佐伯純也、福井県の河村健史、石川県の庄田知充、加藤克郎、富山県の高梨清志、新潟県の伊藤啓雄、秋田県の長谷川潤一の各氏に感謝申しあげたい。

### 環日本海文化交流史研究集会の開催記録

年度	開催日	内 容
H12	H13. 2. 23	環日本海交流史の現状と課題
H13	H14. 2. 22	鉄器の導入と社会の変化
H14	H15. 2. 21	玉をめぐる交流
H15	H15. 10. 24	縄文後・晩期の低湿地集落－生業の視点で考える－
H16	H16. 10. 29	古代日本海域の港と交流
H17	H17. 10. 28	中世日本海域の土器・陶磁器流通－甕・壺・播鉢を中心に－
H18	H18. 10. 27	縄文時代の装身具－漆製品・石製品を中心に－
H19	H19. 10. 26	日本海域における古代の祭祀－木製祭祀具を中心として－
H20	H20. 10. 24	弥生時代の家と村
H21	H21. 10. 23	日本海域の土器製塩－その系譜と伝播を探る－
H22	H22. 10. 29	近世日本海域の陶磁器流通－肥前陶磁から探る－

## 近世肥前窯業史－16世紀末～18世紀－

中野 雄二（長崎県波佐見町教育委員会）

1580年代、大陸からの技術導入によって始まった肥前（現：佐賀県・長崎県）窯業は、17世紀前半代の磁器生産の成功で飛躍的な成長を遂げ、17世紀後半代の海外輸出を契機に生産体制の拡充をはかり、18世紀代には国内向け陶磁器の開発・販路の全国的な拡大等によって、生産規模・生産量ともに他産地を大きく引き離すことになった。

発表では、このような16世紀末から18世紀という肥前窯業の勃興期から隆盛期にかけての陶磁器の諸様相について、生産地を中心とした調査・研究成果を基にしながら、年代ごと・藩ごとに分けて概観した。

今回取り扱った陶磁器の器種は、生産量が多い碗・皿を中心とした。年代については、大橋康二氏の近世肥前陶磁編年による時期区分（Ⅰ期：1580～1610年代、Ⅱ－1期：1610～1630年代、Ⅱ2期：1630～1650年代、Ⅲ期：1650～1690年代、Ⅳ期：1690～1780年代）に依拠し、各期ごとに製品様相の特徴をまとめた。同時に、肥前において窯業が盛んであった佐賀藩・大村藩・平戸藩、それぞれの中核的産地（佐賀藩：有田<佐賀県有田町>、大村藩：波佐見<長崎県波佐見町>、平戸藩：三川内<長崎県佐世保市>）の陶磁器を主に取り上げ、藩による製品様相の相違も提示した。

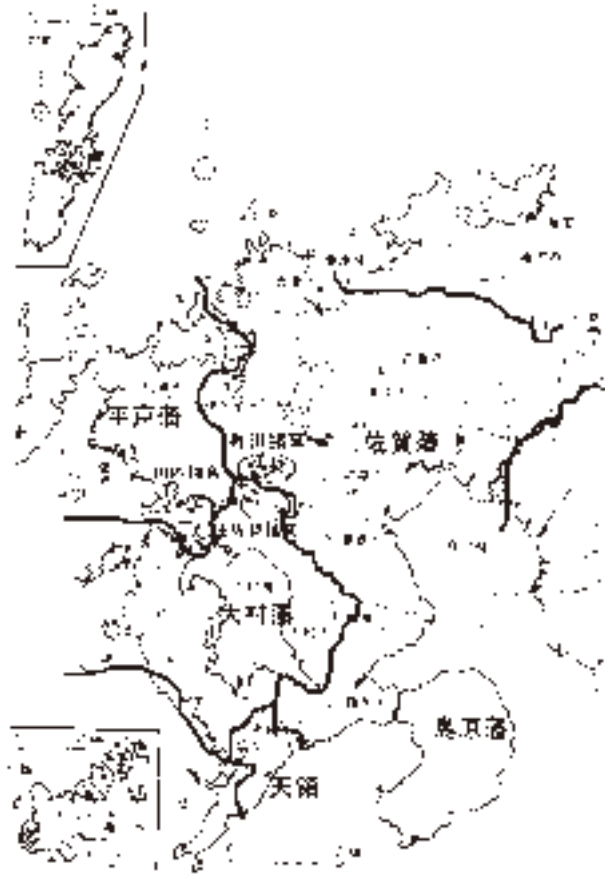
<Ⅰ期>陶器生産のみの段階。

<Ⅱ－1期>文禄・慶長の役後、朝鮮李朝の様々な窯業技術が到来する段階。佐賀藩有田・大村藩波佐見では磁器生産が開始される。

<Ⅱ－2期>陶器生産を縮小し、磁器生産を本格化する段階。佐賀藩有田では窯場の整理統合が行われ、磁器生産体制を強化。色絵の生産開始。大村藩波佐見では「三股青磁」と呼ばれる青磁の優品を生産。平戸藩領内でも磁器生産が始まる。

<Ⅲ期>肥前陶磁の海外輸出が盛んに行われた段階。佐賀藩有田では「柿右衛門様式」の色絵製品をはじめとするヨーロッパ向け輸出品を生産。大村藩波佐見・平戸藩三川内では東南アジア向け染付製品を生産。

<Ⅳ期>海外輸出を停止し、国内向け磁器製品の生産に転換した段階。佐賀藩有田では主に富裕層向けの上手の磁器製品を生産。大村藩波佐見では一般庶民向けの下手の磁器製品（「くらわんか手」）を大量に生産。平戸藩三川内では上手と下手の磁器製品を生産。



肥前地区旧藩領図、有田・波佐見・三川内諸窯位置図

I 期

佐賀藩



大村藩



平戸藩



II 1期



II-2期



佐ノ日蓮寺





肥前諸窯 I ~ IV 期製品図 (S=1/4)

1 : 唐津市飯胴甕下窯、2 : 有田町原明窯、3・4 : 波佐見町下稗木場窯、5・6・11 : 佐世保市葎の本1号窯、7 : 有田町小溝中窯、8 : 有田町小溝上窯、9・10 : 波佐見町畑ノ原窯、12 : 佐世保市葎の本2号窯、13 : 有田町天神山窯、14 : 有田町外尾山窯、15・31・33 : 波佐見町三股古窯、16 : 波佐見町三股青磁窯、17 : 佐世保市長葉山窯、18 : 平戸市中野窯、19 : 有田町長吉谷窯、20 : 嬉野市吉田2号窯、21 : 有田町中白川窯、22 : 波佐見町高尾窯、23 : 波佐見町辺後ノ谷窯、24 : 波佐見町咽口窯、25・27・34・35・36 : 佐世保市江永古窯、26 : 佐世保市伝代官所跡、28 : 有田町窯の谷窯、29 : 有田町広瀬向2号窯、30 : 伝世品、32 : 波佐見町百貫西窯

# 福岡県の陶磁器流通

佐藤 浩司（北九州市芸術文化振興財団）

## 1. はじめに

近世に肥前陶磁器が全国流通を果たす中で、九州島の最北端にあり日本海側諸国、瀬戸内海側諸国への通廊的位置にある福岡県とくに東半部豊前・西半部筑前で陶磁器様相を明らかにするには、肥前陶器にわずかに遅れて生産が始まった上野・高取系陶器の動向を合わせ鏡的に対比することで、肥前陶磁器の流通とそれが果たした役割をより鮮明にとらえることができると考える。ここでは近世陶磁器出現期の様相を中心に概観してみる。

## 2. 豊前国での肥前陶磁器の様相

豊前小倉城郭や城下町の発掘調査から肥前陶器出現期を考える場合は、在地産の陶器である上野・高取系陶器や明・李朝陶磁器などの貿易陶磁、備前・瀬戸・美濃など国産陶器の出土状況を一緒に見ていくなかで、その様相を把握することが重要と考えた。

小倉城新馬場跡1号井戸出土の陶磁器を検討した結果（図1）、肥前磁器が含まれず、肥前陶器灰釉皿が胎土目しかみられないこと、明の景德鎮青花や漳州窯系青花が含まれ、李朝陶器がみられないこと、上野・高取系陶器が全器種の5分の1以上を占めていること、それに対して肥前陶器は4%にも満たないこと、むしろ備前や瀬戸・美濃系陶器のほうが多いことなどがわかった（図2）。

この井戸は曲輪形成土層との関係や、慶長年間絵図との照合から、また京都系土師器の多量出土から、小倉藩主交代期の武家儀礼や饗宴に伴う遺物と判断でき、1620年代前半期におけるものと考えた。よって、在地産の上野・高取系陶器は生産開始当初から陶器の主体を占め、肥前陶器は少ないこと、肥前磁器の出現は1620年代後半以降であることが想定される。これは、次の時期における小倉城御蔵跡D10出土遺物（図3）に1630～40年代の肥前陶磁器が多数含まれること、肥前陶器の砂目溝縁皿（44、45）を含むことと好対照をなし、豊前国での陶磁器様相を物語るものであろう。

## 3. 筑前国での肥前陶磁器の様相

筑前黒崎城下町では黒崎城築城以前の土層（～1604年）から築城？存続期（1604～15年）、廃城から宿場町への変遷期（1615～38年）の陶磁器様相が重層的に把握できたが、上野・高取系陶器は築城開始以前の7面、6面（畠土）でも主体をなしており、肥前陶器胎土目皿が含まれていた。また肥前陶器の砂目溝縁皿も整地層5から1点出土しているが（図4-27）、肥前磁器はもちろんなく、その上層の5面においても確実に伴うものはない。

ところが、博多遺跡群では33号土坑（図5）から小倉城御蔵跡と同一様相の肥前陶磁器が出土したが、上野・高取系陶器（534、549）は極端に少なく、おなじ筑前でも黒崎城下町とは様相が異なる。

## 4. おわりに…日本海流通の特質

近世陶磁器の一大生産地・肥前を至近距離にもつ福岡県域の陶磁器流通（図6）には、上野・高取系陶器という少なくとも肥前磁器より以前に出現した在地産陶器があることにより、同じ日本海域他都市にみられる肥前陶磁器の器種比率や在地産陶器との拮抗関係、また流通形態などに差異があるのは当然であろう。今回の集会では、各地の肥前陶磁器出現期の様相に力点がおかれ、環日本海域の流通実態や港湾、中継地でのあり方、陸路との関連や海運業者の動きなど、多角的視点での報告や討論ができなかったが、今後とも在地産陶器を基底にすえ、肥前陶磁器の流入状況や他地域への遠隔地流通に海路が果たした役割などを検討し、近世日本海域における陶磁器流通を考えていきたい。

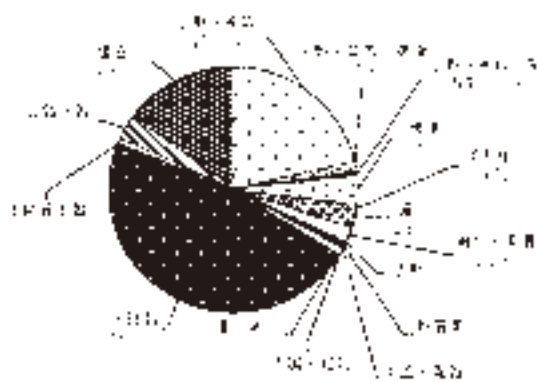


図1 1号井戸出土遺物産地別グラフ



図2 小倉城新築地跡1号井戸出土陶磁器(1/8, 1/12)

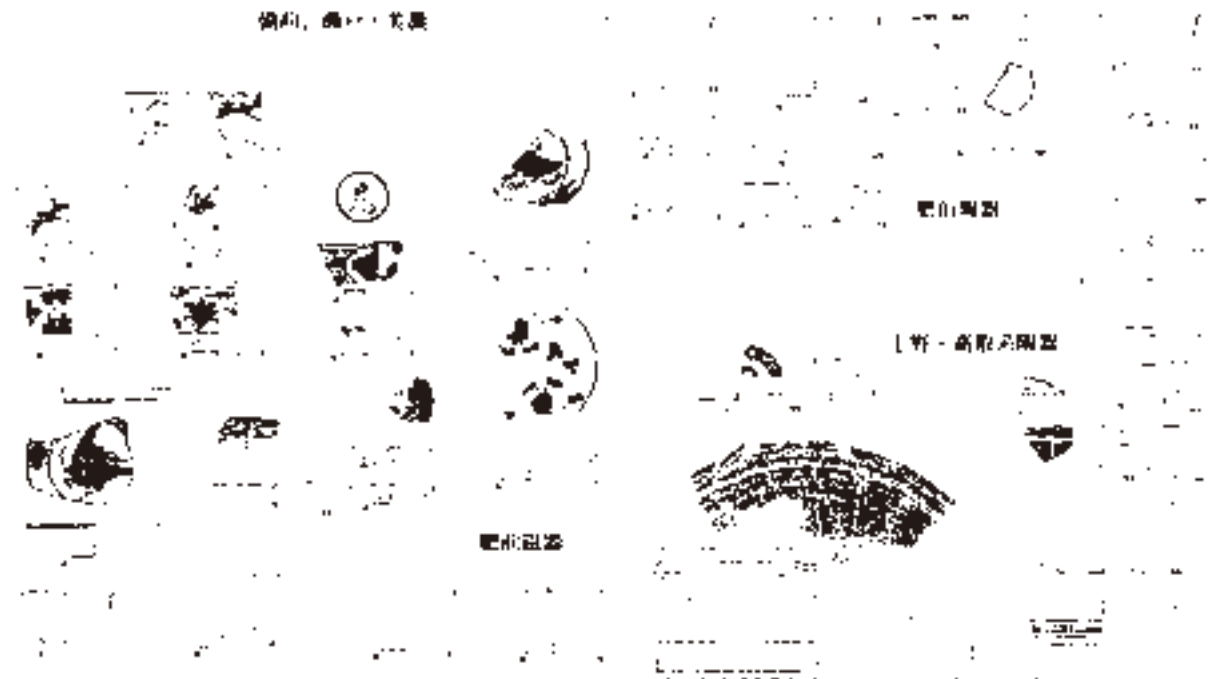


図3 小倉城跡10号井戸出土陶磁器(1/8)

● 七尾陶器群 △ 上野・高取系陶器群 ○ 中野・野洲系陶器群

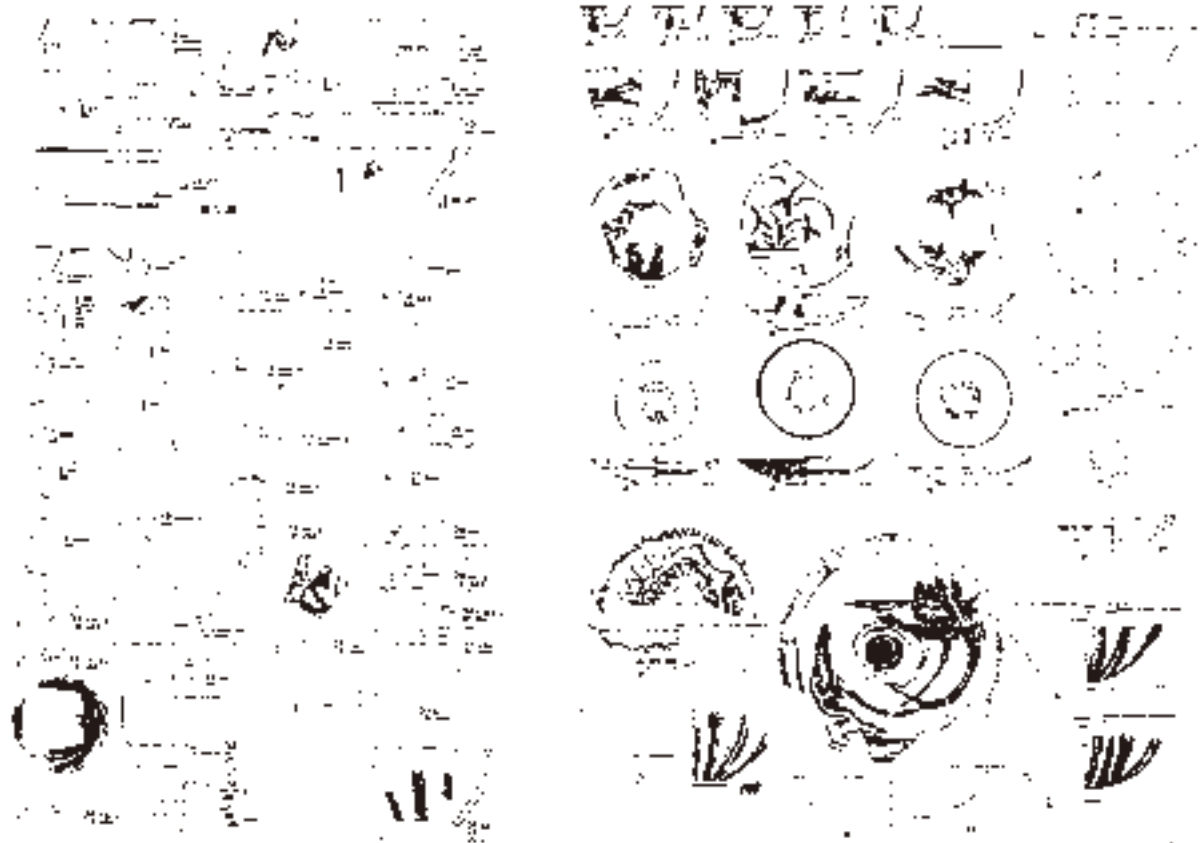


図5 博多遺跡群89次33号土坑  
出土陶磁器(1/8、1/12)

図4 熊崎城下町遺構面・陸水層  
出土陶磁器(1/8、1/12)

- 中野・野洲系
- ★ 中野系
- △ 上野・高取系
- ▲ 高取系
- 七尾系
- 中野系

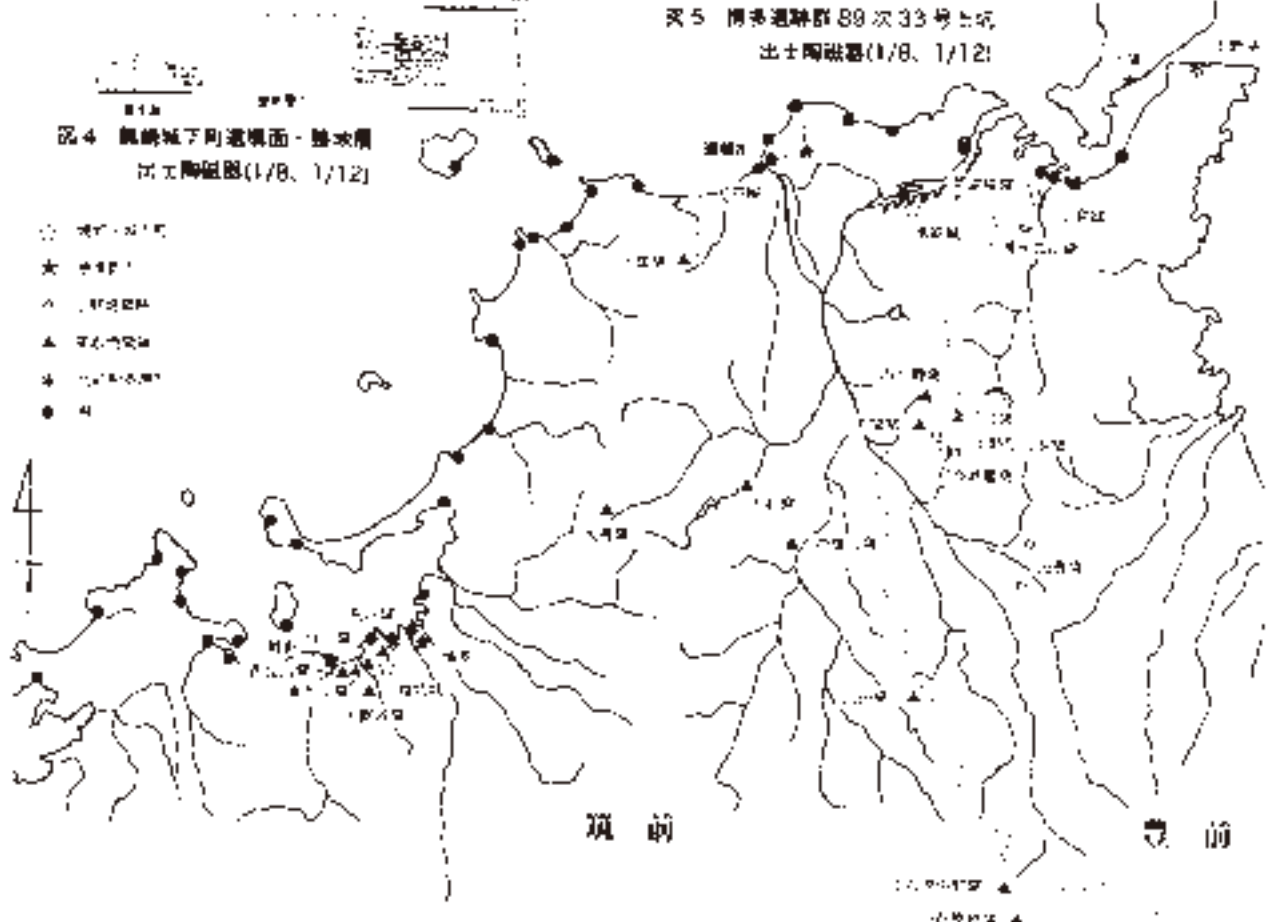


図6 上野・高取系陶器群の分布と河津流跡・港位圖説 (約 1/600,000)

# 山陰地方における近世陶磁器の流通

佐伯 純也（米子市教育文化事業団）

## 1. はじめに

山陰地方は、中国地方の北部日本海沿岸地域一帯の鳥根県、鳥取県の範囲に相当し、その海岸線の延長距離が250kmにも及ぶ長大な地域である。

この地域では、これまで近世遺跡の調査事例が少なく、肥前陶磁器の研究は遅れていたが、石見銀山遺跡や米子城跡などにおいて調査事例が蓄積されており、近年では松江城下町遺跡や鳥取城跡でも発掘調査が実施されるようになるなど、近世考古学に対する関心は徐々に高まりつつある。

## 2. 山陰地方における肥前陶磁器の様相

鳥根県における初期の肥前陶磁器の様相は、胎土目積段階の資料が石見銀山遺跡や富田川河床遺跡、松江城下町遺跡で確認されている。その中でも松江城下町遺跡は、築城開始時期が1607年にほぼ限定される資料として重要である。ここから、1633年までに埋没したと推測される最下層の遺構面から見つかった肥前陶器は、胎土目積段階の資料が主体であり、砂目積段階の資料がほとんど含まれていないことが判明している。また、月山富田城の城下町遺跡である富田川河床遺跡では、洪水で埋没した砂層内から「寛永21（1644）年」銘の木簡が出土しており、これと共伴する遺物として、砂目積の唐津皿とごく少数の伊万里焼が出土しており、1640年代に至っても肥前磁器の占める割合は低かったことが窺える。

鳥取県内では、16世紀末に築城された米子城下町遺跡の上級武士の屋敷跡と考えられる33次調査地点から、礎石建物跡に伴って、瀬戸美濃系陶器や備前焼の建水、唐津焼の皿などが検出されており、中世末から近世初期にかけてのものと思われる資料が得られている。また、米子城下町遺跡や富田川河床遺跡では、李朝系陶器の出土例が多く確認されており、築城開始時期が遅れる松江城下町遺跡との違いが認められる。

最近、山陰地方での様相が明らかになってきた陶器播鉢については、16世紀までは備前焼が中心となるが、17世紀以降には肥前播鉢が増加するとともに、山口県の須佐唐津の播鉢が出土するようになる。18世紀には関西系の播鉢に加えて、在地で生産された播鉢も見られるようになり、肥前播鉢のシェアは減少するものと考えられる。また、18世紀後半以降には、在地産陶器播鉢の点数が増加する。

壺・甕類は、17世紀前半以降に備前焼から肥前産の製品へと移り変わるが、18世紀以降には鳥根県西部地方で生産された石見焼系の製品が中心を占めるようになる。ただし、旧因幡国に属する鳥取市近辺では、越前焼の甕が多く搬入されており、鳥取県内でも因幡と伯耆では様相が異なる可能性がある。

## 3. 流通方法

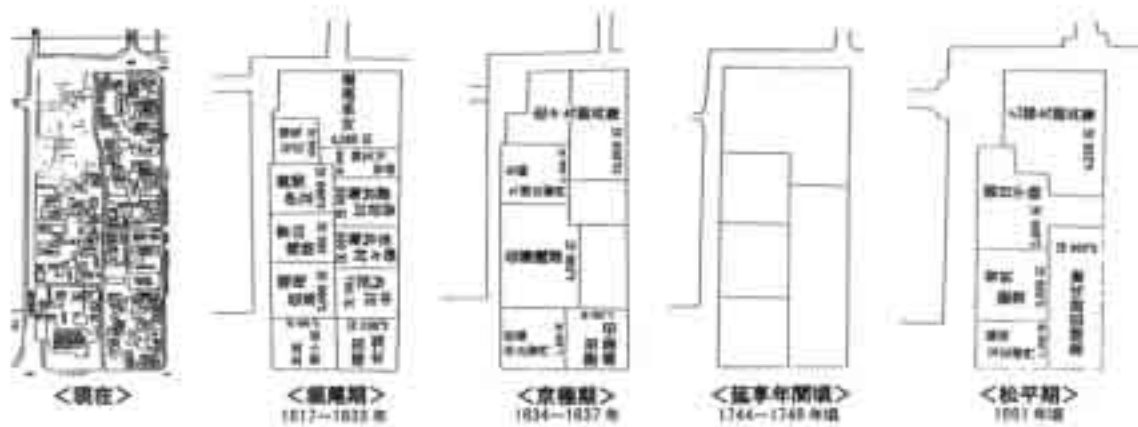
陶磁器の流通については、港湾流通に関する文献が少なく不明な点が多いが、山陰地方は山地から海岸線までの距離が短く、河川は急流となりやすい地形となっており、鳥根県西部の河川や出雲の斐伊川・神戸川水系を除くと、河川を利用した水運はあまり発展しなかったものと推測される。また、中世から近代まで山陰の主要な産品であった鉄の運搬には、牛馬が用いられており、陶磁器も牛馬を用いた陸上交通によって流通したものが多かったと推察される。



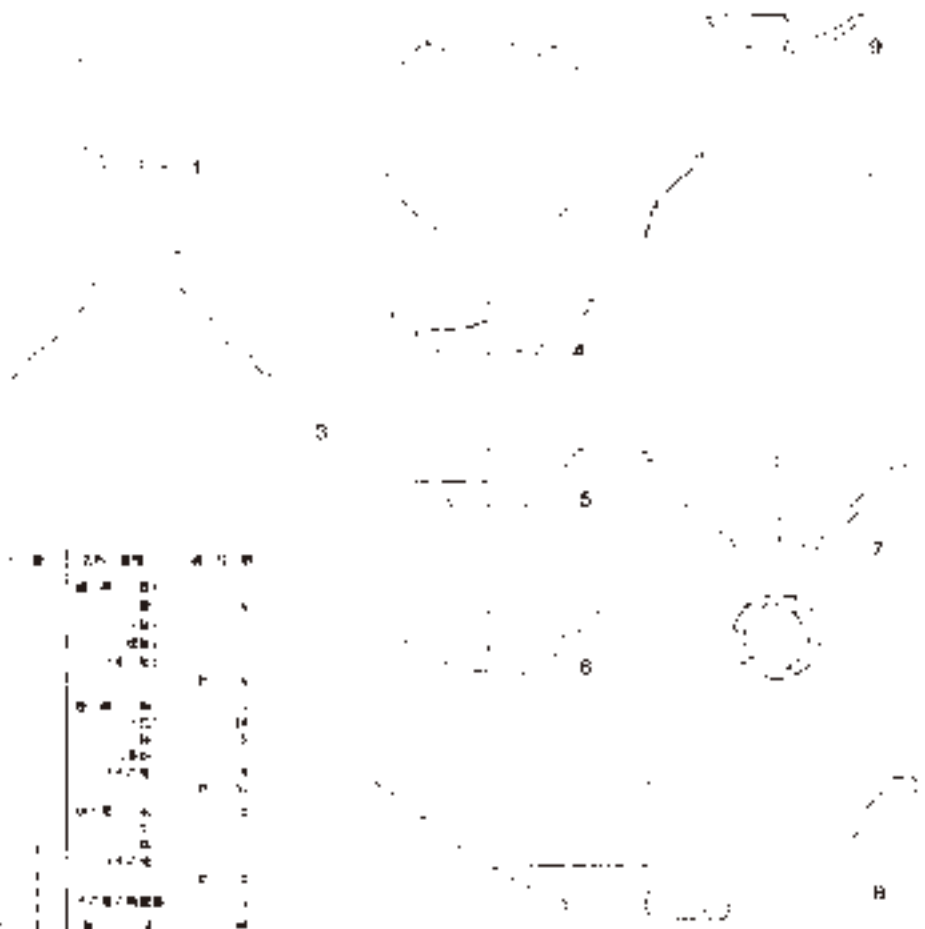
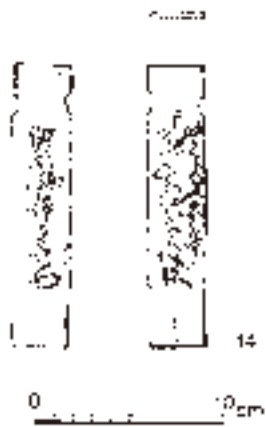
第1図 山陰地方の主な近世遺跡



第2図 松江城跡 調査地点



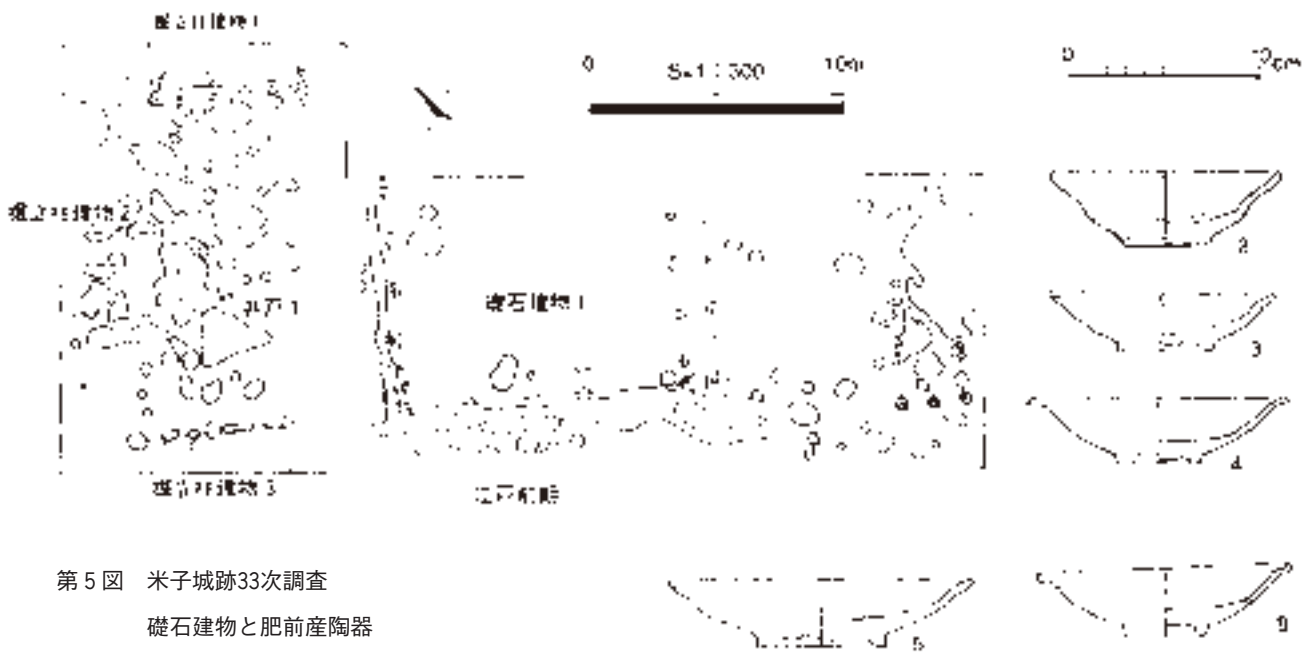
第3図 松江城下町（家老屋敷跡）の変遷図



層位	出土地	品名	数量	形状	寸法
砂層	A	土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
砂層	B	土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5
		土師器 鉢	1	丸底	18.5 × 18.5

表1 砂層出土陶磁器数量表

第4図 富田川河床遺跡 砂層出土遺物



第5図 米子城跡33次調査  
礎石建物と肥前産陶器

# 福井県（福井城跡）の様相

河村 健史（福井県立歴史博物館）

福井県下で調査された17～18世紀の遺跡のうち、調査件数が多く、資料の豊富な福井城跡を以て福井（越前）の例として以下述べる。

## 1. 福井城跡の画期

福井城跡および北庄城跡について、次のように時期区分している。15世紀～1574年を朝倉期北庄期。1575～1600年北庄城期だが1583年柴田勝家落城し、画期と成り得るが現状区分不可能のため織豊期を一括する。1601年～19世紀後半福井城期（1624北庄→福居と名称変更される。）1606年福井城完成。1669年天守をはじめ大半を焼く寛文の大火。1686年貞享の大法、石高を半分にされたため、藩士の大量解雇されることにより屋敷の割り当てが大きく変わる。

以下、各画期毎の出土遺物の様相を見てゆく。

## 2. 福井城創建前後（1601年頃）

・北陸新幹線福井駅部地点（位置図53A） 遺構53032 武家屋敷のゴミ廃棄土坑である。遺物は瀬戸美濃および胎土目絵唐津が中心である。土師質皿や瀬戸美濃灰釉青磁写し碗等に古い要素（16世紀後半）を見ることができる反面、絵唐津や大窯志野等が多く含まれ、新しい要素（17世紀初頭）がみえる。また軟質施釉陶器も出土する。越前焼播鉢では口縁下沈線の凹みが浅く、17世紀初期の様相を呈する。以上、絵唐津および志野を含むが、織部は含まない遺物様相から16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

## 3. 寛文大火（1669年）以前

・福井城西口地下駐車場地点（位置図54A） 遺構4-401 本丸に近く、城代等重臣の屋敷地であった。主な遺物は伊万里、中国染付、唐津唐津、瀬戸美濃、越前、土師質皿である。17世紀前半としては伊万里・中国を含め磁器の比率が高く、対して唐津が少ないことが特色である。伊万里では外面鉄釉碗や蘭絵小坏、見込に砂目の残る軟質胎土の染付皿などがみられる。中国染付は呉須手大皿、景德鎮系では碗類・小坏や壺、向付が出土し、他の遺跡と比べ数量とともに器種の豊富さが特色である。唐津では胎土目と共に砂目の両方がみられる。瀬戸美濃は非常に少ない。食器類の中心は肥前系に移ったことを感じさせる。福井城下絵図によると慶長18年の絵図に記された住人と、次に古い万治2年以前作成絵図の住人が変わっており、この住人入れ替わり時（17世紀前～半ば）の遺物群と考える。

## 4. 寛文大火（1669年）以降

・国際交流会館地点（位置図55） 遺構82・230 調査区は200石クラスの中級武家屋敷である。遺物の様相は、瀬戸系が減少し、伊万里が増加する。また、唐津では京焼風や量産形呉器手碗、飴釉碗等が多量に出土する。特に呉器手碗は量的にも多く、福井城下では身分の上下を問わず出土し、また村落遺跡でも普遍的に出土する。これに対し京焼風陶器は量的に少なく、特に皿が少ない。この他珍しいものでは京焼色絵テッセン紋碗がみられる。伊万里でも色絵碗が2つ出土している。中国染付は上級武士では皿・大皿・碗・瓶他多彩であるが、中級武家ではほとんど小坏のみでみられる。

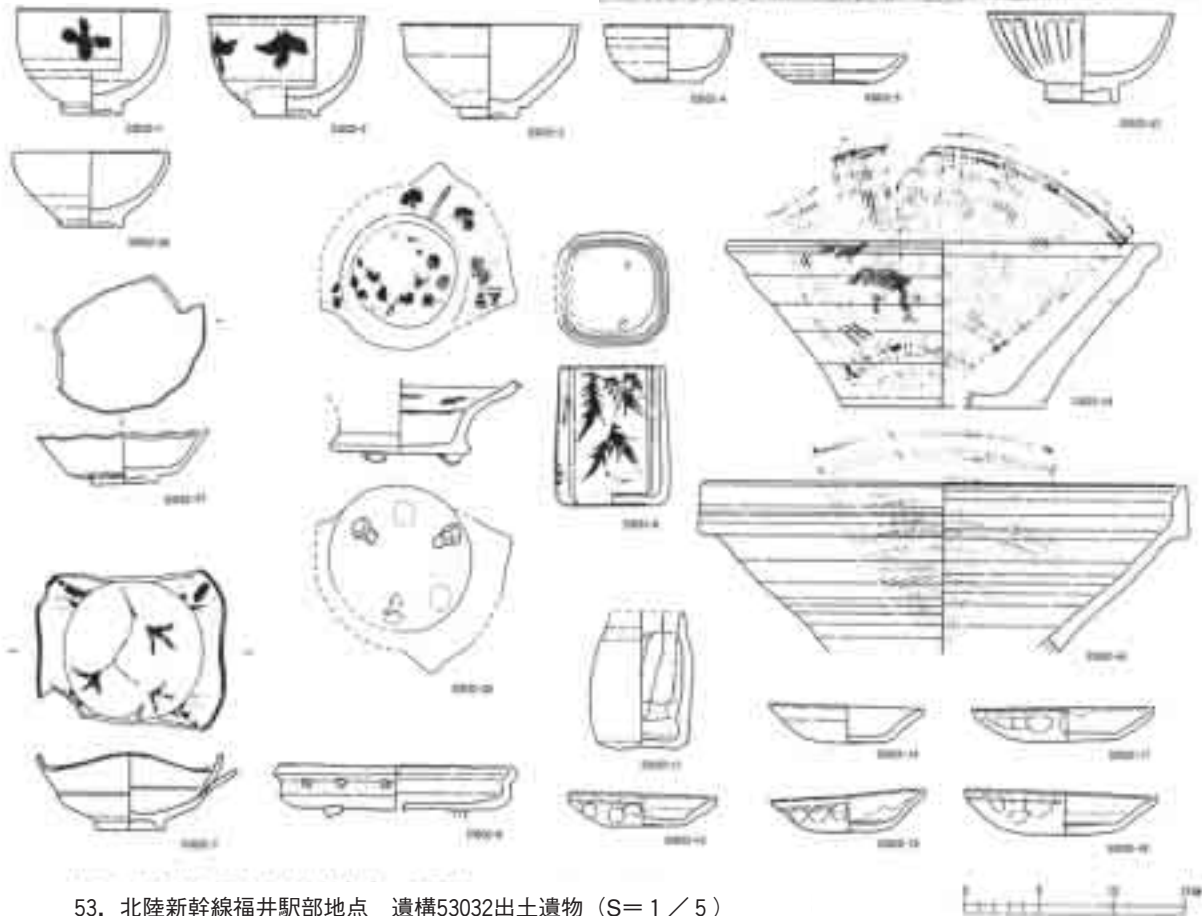
## 5. 福井城下への搬入経路

肥前陶磁、京信楽系製品等は、他の北陸の消費地の出土状況から船（日本海）→三国港→足羽川→福井城で入ってきたと考えられる。一方、少量ながら定量出土する瀬戸美濃は、足羽川ルートその他、美濃街道経由の可能性も考えられる。

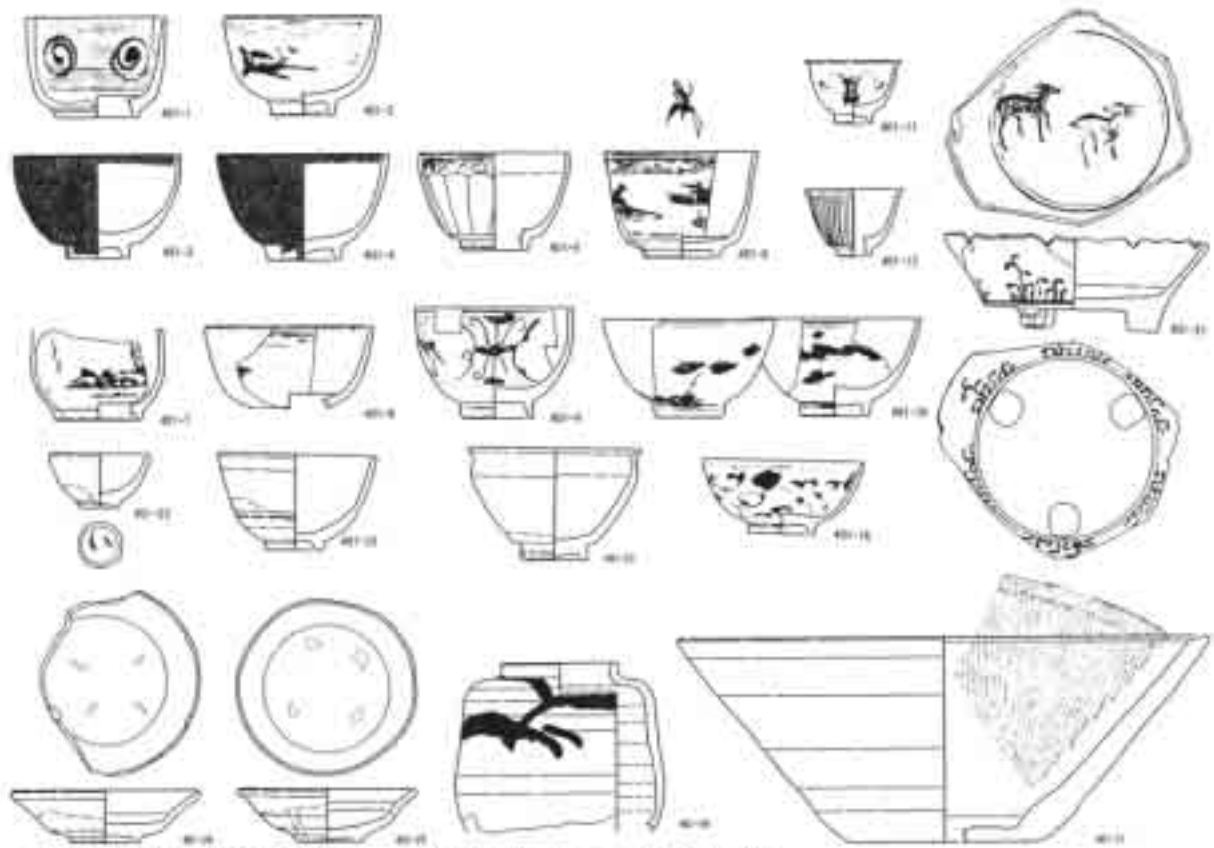




福井城跡関連調査地点位置図 (S=1/10,000)



53. 北陸新幹線福井駅部地点 遺構53032出土遺物 (S=1/5)



54. 駅西口地下駐車場地点 遺構 4 - 401 出土遺物 (S=1 / 5)



55. 国際交流会館地点 遺構82 出土遺物 (S=1 / 5)

# 金沢城下町の様相－広坂遺跡出土品の変遷から－

庄田 知充（金沢市埋蔵文化財センター）

## 広坂遺跡の居住者層と時期区分

広坂遺跡は金沢城南方に位置し、遺跡の南辺は慶長16年(1611)築造の西外惣構により区切られる。遺跡は外惣構造成以後都市的様相を示す。惣構を軸線とした溝に区画された方形の田の字形区画は、慶長16年の「金澤侍屋敷之定」から500～2,000石前後の武家居住地と比定できる。慶長期の遺物のほとんどが元和～寛永期廃絶の遺構から出土した。史料と対比できる画期は、寛永8年(1631)、元禄3年(1690)、宝暦9年(1759)の大火である。絵図によると居住者層は、正保期が4,000石～1万1,070石、寛文期以降が200石～3,000石の直臣である。本遺跡では、藩政期を通じてほぼ類似した階層が居住したため、人持～平士クラスの武家における陶磁器の所有状況を年代を追って検討することができる。

広坂遺跡における火災などの事件を画期として、Ⅰ～Ⅳ期に区分し、他地域の比較資料からの推定画期を枝番号として時期設定した。各時期区分については下記の通りである。

Ⅰ－Ⅰ期…16世紀末～17世紀1/4（「元和九年」木簡出土ⅡSX2013下限）。Ⅰ－Ⅱ期…17世紀2/4前半（寛永大火下限）。Ⅱ－Ⅰ期…17世紀2/4後半～3/4。Ⅱ－Ⅱ期…17世紀3/4末～4/4中頃（元禄大火下限）。Ⅲ期…17世紀4/4後半～18世紀3/4前半（宝暦大火下限）。Ⅳ－Ⅰ期…18世紀3/4後半～18世紀4/4。Ⅳ－Ⅱ期…19世紀1/4～3/4前半

## 出土陶磁器産地組成の変遷

Ⅰ－Ⅰ期…磁器は中国磁器のみで構成される。陶器は肥前（碗・皿・茶陶・播鉢・甕・瓶等）が圧倒的多数だが、瀬戸美濃（茶陶・皿等）、越前（播鉢・甕）、備前（播鉢・瓶等）、越中瀬戸（茶陶・皿等）、信楽（茶陶・壺・花生等）等、それぞれの産地の特色が反映された多彩な組成となっている。

Ⅰ－Ⅱ期…基本的にはⅠ－Ⅰ期の組成を引き継ぐが、偏在的に肥前磁器を包含する遺構がみられる（2時期に細分される可能性あり）。火災片付土坑では、同形態の皿等の一括廃棄が見られる。Ⅱ－Ⅰ期前半…前代の寛永大火でストックが廃棄され、まとめて新規購入したことが原因か、産地に極端な変化と偏りが見られる。前代までとは中国磁器と肥前磁器の比率が逆転し、圧倒的に肥前磁器が多くなる。碗・皿類で磁器と競合する肥前陶器の比率が減少し、肥前磁器と同程度もしくはそれを下回る。その他の陶器産地の比率も軒並み減少し、とくに越前・備前・越中瀬戸の減少は、主要器種である播鉢が肥前に置き換わるためであろう。茶陶の減少から瀬戸・美濃陶器も減少する。Ⅱ－Ⅰ期後半…肥前磁器が圧倒的優勢で、肥前陶器は漸減する。中国磁器はなくなる。Ⅱ－Ⅱ期…肥前磁器が圧倒的優勢で、肥前陶器の比率は低迷する。Ⅲ期前半にかけて瀬戸・美濃陶器はほとんど見られない。Ⅲ期前半…京焼がはじめて組成の中に現れる。肥前陶器は減少傾向が続く。Ⅲ期後半…肥前磁器が圧倒的に優勢で、陶器は肥前が激減するが、京・信楽系が碗を中心に増加傾向となる。瀬戸・美濃陶器は碗類を中心に少量出土。須佐（播鉢・鉢）が出現するが、Ⅳ－Ⅱ期まで比率に変化はなく、生産規模の問題であろう。Ⅳ－Ⅰ期…肥前磁器が微減する。肥前陶器の大形品の存在や、京・信楽系陶器（碗・土瓶）と産地不明の製品が増加することの影響であろう。Ⅳ－Ⅱ期にかけて中国の清朝磁器がわずかに現れる。Ⅳ－Ⅱ期…肥前磁器はⅣ－Ⅰ期と同程度で、新たに瀬戸磁器、九谷磁器が組成に表れる。肥前陶器がⅢ期後半以来一定量あるのは、播鉢・刷毛目系の鉢・皿に器種が固定化されているためであろう。京・信楽系陶器の器種は、碗・土瓶・土鍋に集約される。瀬戸・美濃陶器は相変わらず多くはないが、鉢や植木鉢、（組成には表れないが火鉢）など器種分化が進み、バリエーションにとんだものとなる。

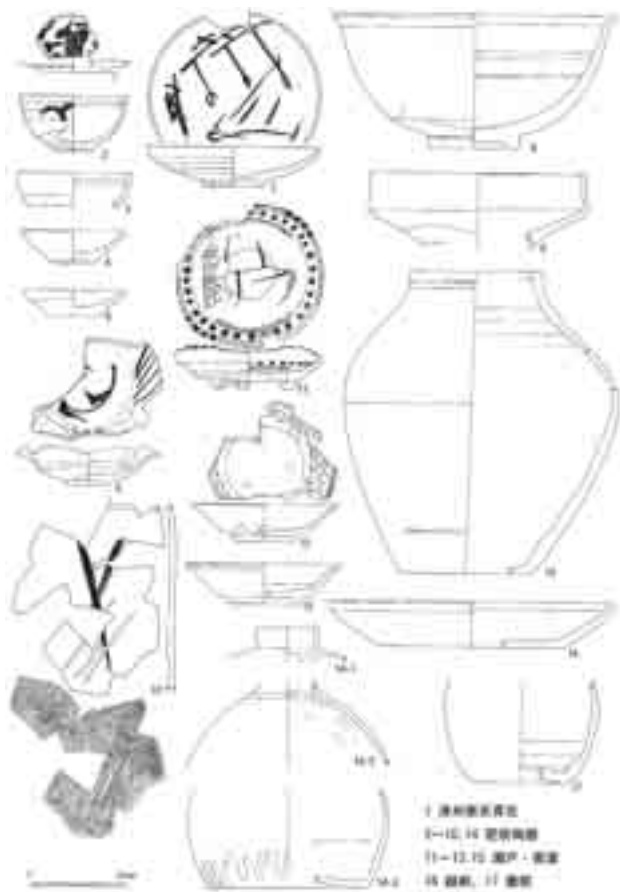


1, 2, 4 墨書曲輪高脚碗, 3 淺中深底高脚碗, 5 寶冠, 6, 8, 12, 14-15, 17 墨書高脚碗  
7, 8, 11, 15, 17, 18 淺口・高底, 12 淺中深口, 22 雙面刻輪高脚碗

第1図 II SX2013 (I -1 期)「元和九年」墨書木簡共伴

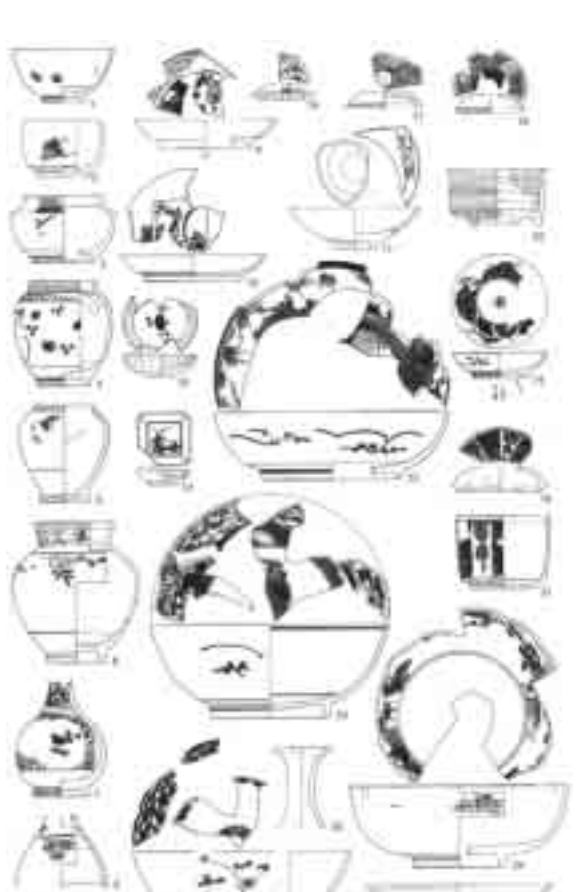


第4図 I SX3070 (II -2 期前半)



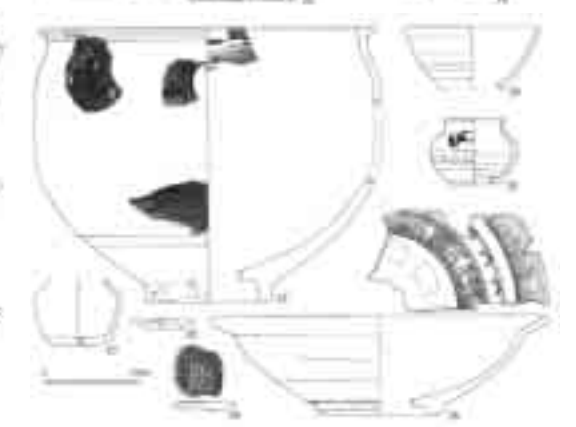
1 淺中深底高脚碗  
8-11, 14 墨書高脚碗  
15-17, 19 淺口・高底  
16 墨書, 17 墨書

第2図 II SD2018 (I -2 期) 寛永大火



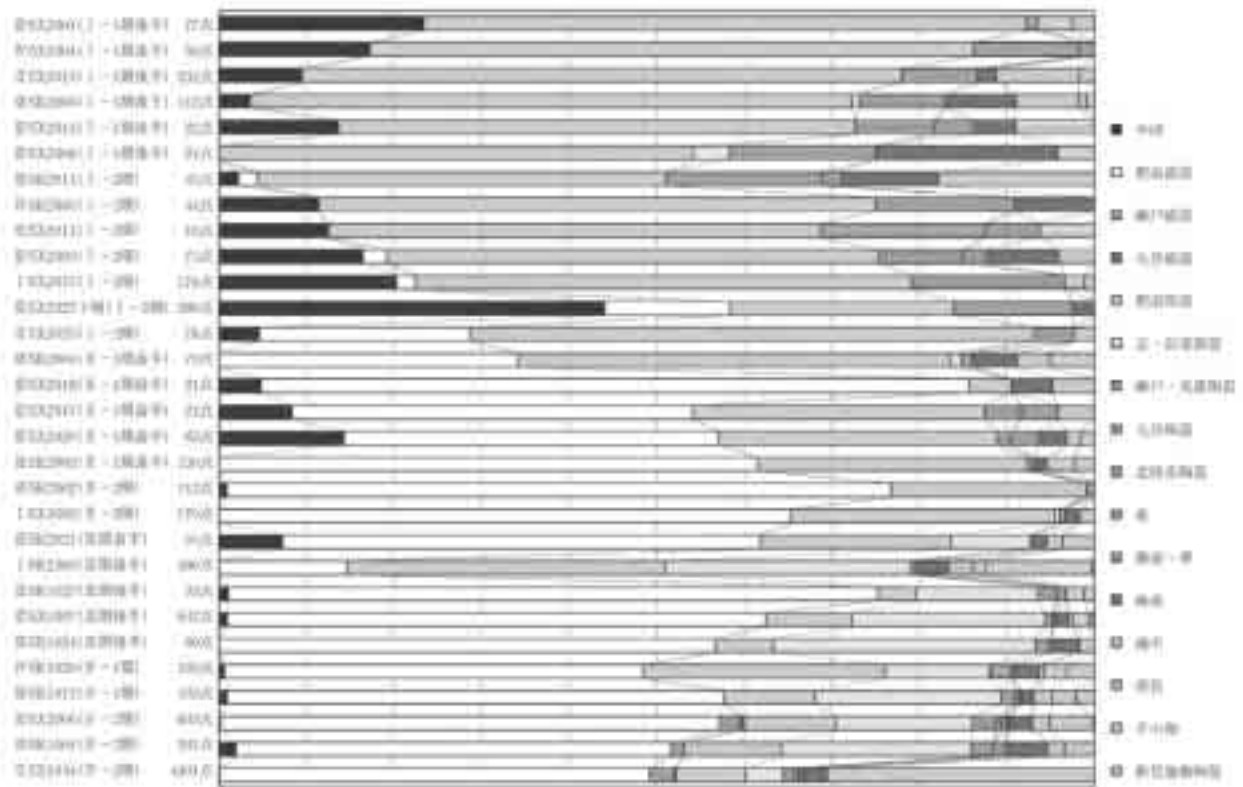
1 墨書高脚碗, 2-10 墨書高脚碗, 11 墨書  
8 淺口・高底, 17 淺中深口

第3図 I SK2421 (II -1 期前半)



第5図 II SK1083 (II -2 期末) 元禄大火

広坂遺跡出土陶磁器産地組成



品名	数量	重量	割合	中込	野島産	瀬川産	丸井産	野田産	高・御幸御器	瀬川・丸井御器	丸井産	北村産	赤	御幸・赤	赤	瀬川	赤山物	新瓦産物等
寛政20年(1) - 4期後半	77点	25.4%		66.8%			3.3%	3.3%										
天明20年(1) - 1期後半	30点	11.3%		66.8%			11.3%			3.7%								
天明20年(1) - 2期後半	23点	8.3%		66.8%			8.3%			3.2%	3.2%	3.2%						
天明20年(1) - 3期後半	112点	39.4%		66.8%	8.0%	8.0%			8.9%	1.2%	4.3%	4.3%						
天明20年(1) - 4期後半	30点	10.7%		66.8%	4.7%				4.7%	4.3%	3.2%							
天明20年(1) - 1期	44点	15.7%	3.3%	66.8%			27.3%		3.2%	11.3%	11.3%							
天明20年(1) - 2期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			4.0%								
天明20年(1) - 3期	7点	2.5%		66.8%			9.3%			4.3%								
天明20年(1) - 4期	27点	9.7%		66.8%			11.9%			3.7%								
天明20年(1) - 1期	38点	13.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 2期	19点	6.8%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 3期	29点	10.3%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 4期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 1期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 2期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 3期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 4期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 1期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 2期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 3期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 4期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 1期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 2期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 3期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 4期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 1期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 2期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 3期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 4期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 1期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 2期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 3期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								
天明20年(1) - 4期	10点	3.5%		66.8%			11.0%			3.2%								

表1：日置産品の確率割合に則しては、野田法人窯が市文化振興財団窯が市産窯文化財センターの平成18年度土器調査にあたって、主要な土器の土器のもと、野田が協賛して実施した。調査結果とその分析は、野田法人窯が市文化振興財団窯27年度産窯文化財センター2018年度調査報告書(時代の中のもの)「一歩を踏み出す」にも記載されている。重要：野田産品の確率割合にあたっては、野田が野田窯子(文化財保護課)の協力を得て実施した。

高木伊知郎 (岡山大学文学部教授)  
 山下裕司 (野田法人窯が市文化振興財団窯が市産窯文化財センター 主任)  
 志子健一 (野田法人窯が市文化振興財団窯が市産窯文化財センター 主任)  
 松澤紀人 (野田法人窯が市文化振興財団窯が市産窯文化財センター 主任)

# 石川県における肥前陶磁器の流通

加藤 克郎（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

## 肥前陶磁器の様相と変遷

石川県内における肥前陶磁器の流入時期について、良好な資料群に恵まれている金沢城跡及びその周辺遺跡の資料から検討した。天正年間（1573～1591）段階の石川門前土橋白鳥堀調査区では、豊富な陶磁器類が出土しているが、肥前陶器は確認できない。慶長年間（1596～1614）段階では、良好な資料群には恵まれていないが、元和6年（1620）火災で廃絶したと推定される本丸附段のゴミ廃棄土坑（2004-1地点SK15）や、寛永8年（1631）大火後埋められた祭祀関連土坑（2004-1地点SK11）から肥前陶器が出土していることから、金沢への肥前陶器の流入は、慶長年間後期頃から元和年間にかけての時期であると想定される。

下限が元和8年〔1622〕頃と推定される、兼六園遺跡（江戸町跡推定地）第3遺構面では、陶磁器の主体は既に肥前陶器（30%）が占めており、胎土目と絵唐津を中心（砂目1点）とするが、肥前陶器は確認できない。このことは、寛永8年（1631）大火層と推定される、東ノ丸附段2002-7地点VI層や車橋門石垣2・3間焼土等においても同様である。

上限時期が寛永9年〔1632〕頃と推定される石川門前土橋盛土3で、初めて肥前磁器筒碗の出土が確認され、金沢における初期伊万里染付流入初期の事例として注目される。

17世紀後半には肥前磁器が本格的に確認できる。金沢城下の町屋跡である安江町遺跡（第2次）のゴミ廃棄土坑SK206、SK227の事例では、陶磁器組成の41%を肥前陶器が占めるが、肥前磁器の定量出土が認められ、磁器と陶器の比率が1:1（SK227）～1:2（SK206）であり、量比差に縮小傾向が認められる。18世紀になると、肥前磁器が組成の主体を占める遺跡が確認でき、武家地と推定される安江町遺跡（第1次）のゴミ廃棄土坑SK245の陶磁器組成は、肥前陶器が32%、肥前磁器が43%であり、量比差が逆転する。また陶器では、肥前陶器の減少に伴い京信楽系の増加が確認できる。

また、農村部の様相では、都市部と比較して、大皿類、色絵、京焼系陶器類が殆どなく、絵唐津、土師器皿の出土が極めて少ないことが特徴である（谷内ブンガヤチ遺跡：17世紀～18世紀前半など）。

なお17世紀後半には、大聖寺藩領の九谷古窯跡において磁器が生産されたが、八間道遺跡（大聖寺藩家老屋敷跡）においても、肥前製品出土量が陶器・磁器ともに最も多く、九谷古窯製品はわずかに1%を占めるだけで、色絵は出土していない。

## 文献・海岸採集資料から見た肥前陶磁器の流通ルート

織豊期における北陸・九州間の海運は、文禄・慶長の役による兵站物資輸送を契機として、盛んになったと推定される。また寛永16年（1639）に始まる、下関経由で大坂へ加賀藩米を廻送する「大坂のほせまい登米」は、後の「西廻り航路」に当たる流通経路であるが、管見では、陶磁器類の流通を示す17世紀前半以前の文献は見当たらない。17世紀後半以降になると、城下町金沢の外港である宮腰に「唐津焼物舟」が着岸していること（貞享3年〔1686〕）や、「瀬戸物類」の馬借による陸送を示す文献（寛延2年〔1749〕）が確認できる。また本吉、安宅、黒島では、江戸時代後期から末期の「唐津物」入港を示す文献が確認でき、北前船による肥前陶磁器流通の一端が判明する。

また日本海域水中考古学会・金沢大学考古学研究室による能登半島での海岸踏査では、17～19世紀代の肥前陶磁が多く採集されている。これらは、難船時の「打荷（海中に投棄された積み荷）」や、沈没船資料も含まれると推定され、日本海のうちにの海運による肥前陶磁の流通を裏付ける重要な資料である。



第1図 主な近世遺跡・港津の位置

番号	遺跡名	市町
1	飯田町遺跡	珠洲市
2	時国古屋敷遺跡	輪島市
3	西川島遺跡群	穴水町
4	大津ロクベエ遺跡	七尾市
5	谷内ブンガヤチ遺跡	中能登町
6	木津窯跡	かほく市
7	河原市焼塚	金沢市
8	木越光琳寺遺跡	
9	春日山窯跡	
10	会沢城跡 会沢城下町の遺跡※	
11	野田山墓地	野々市町
12	金石本町遺跡	
13	打木町東遺跡	
14	御経塚遺跡デト地区	白山市
15	粟田遺跡	
16	三納アラムヤ遺跡	
17	八田中中村遺跡	
18	松任城跡	小松市
19	乾遺跡	
20	東町遺跡	
21	桑島館跡	
22	小松城跡	加賀市
23	大川遺跡	
24	幸町遺跡	
25	若杉窯跡	
26	八幡遺跡	
27	蓮代寺遺跡	
28	松山窯跡	
29	山代再興九谷窯跡	
30	敷地天神山遺跡	
31	大聖寺城跡	
32	八間遺跡	
33	耳間山遺跡	
34	九谷磁器窯跡	
35	九谷A遺跡	

※広坂遺跡、安江町遺跡、下本多町遺跡ほか



【金沢城跡石川修輔工事報告書 - 三島岡丸南西石垣 - (本文編)】(2010)  
掲載範囲: 加賀

第2図 金沢城跡周辺の発掘調査位置図



第3図 金沢城跡本丸附段出土遺物



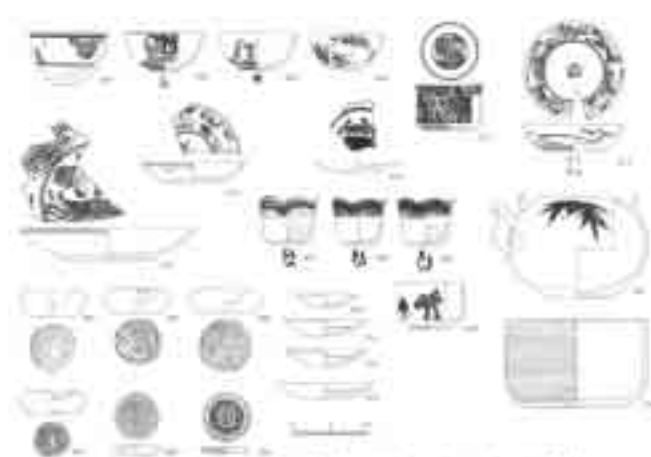
第4図 江戸町推定地  
第3遺構面 出土遺物



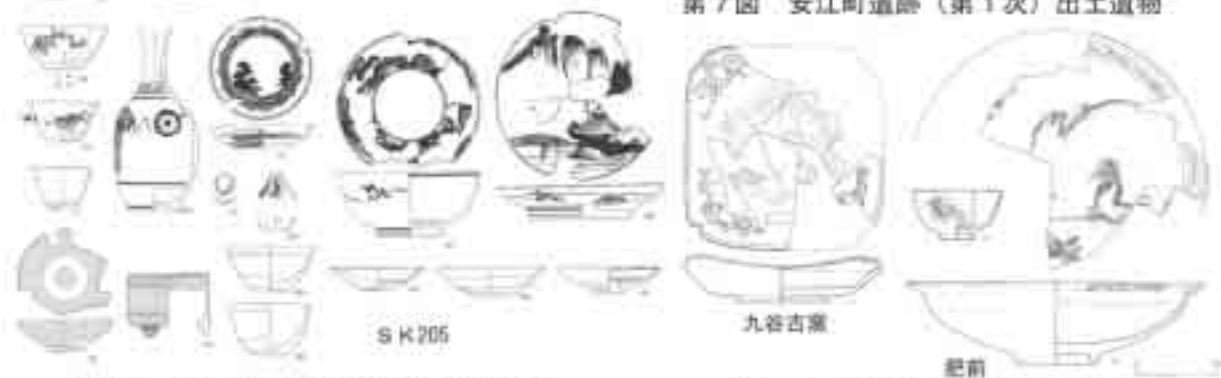
第5図 金沢城跡石川門前土橋  
盛土3 出土遺物



第6図 江戸町遺跡(第2次)出土遺物



第7図 江戸町遺跡(第1次)出土遺物



第8図 八間道遺跡出土遺物



# 富山県における肥前陶磁器の流通

高梨 清志（富山県埋蔵文化財センター）

富山県における近世遺跡の調査は高速道路などの大規模発掘の例外を除けばほとんど行われておらず調査事例はまだ少ないのが現状であり、今後の研究の進展が期待される。

## 陶磁器の組成の変遷

遺跡の種別等により違いはみられるが、全体的な傾向としては瀬戸美濃の製品が少なく、越中瀬戸の占める割合が多い。特に近世後期の遺跡に関してはその傾向が伺える。肥前陶磁器については梅原胡摩堂遺跡など一部の遺跡についてはⅠ期から出土例があるがⅣ期以降に増加する。城下町・門前町では肥前、農村遺跡・生産地周辺遺跡では越中瀬戸が多くなる傾向がみられる。また、近世土師器は城下町など都市遺跡で出土し、農村部では見られない。

## 地方窯

越中瀬戸焼は16世紀後半に、尾張国瀬戸から陶器工人を招来し開窯した施釉陶器窯である。本格的な施釉窯としては、日本海側では最古と言われ、江戸時代を通じ藩の御用窯として前田家の庇護の下、茶道具の製作を中心に発展し、瓦や日常雑器などを生産した。

これまでの研究成果は文献史料分析と考古学的分析の2点から進められてきた。前者は窯関係古文書に記載されている発給者や発注時期の特定などで、後者は表採資料の整理や瀬戸美濃との年代対比などである。操業時期については、文献から地元に残る前田安勝文書の分析から天正16・17年としている。操業時期については、文献では天正16・17年としている。考古学的には天正11年に落城した弓庄城跡出土品に同製品があることから、落城以前の操業が指摘されている。

宮田進一氏は窯表採資料や消費地の調査成果から越中瀬戸の変遷とその分布を3期に分けている。その分布域は、西は石川県加賀市、南は岐阜県飛騨市、東は北海道まで分布し、その中心は金沢市から上越市までとしている。

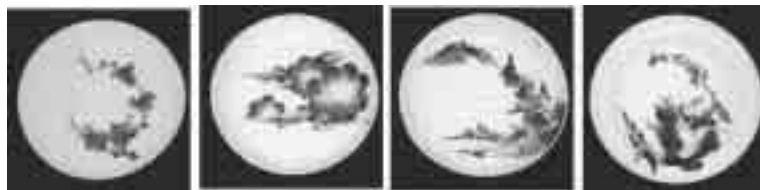
Ⅰ期：（16世紀末～17世紀初め） 大窯製品には碗、皿、壺、搦鉢がある。これらは瀬戸美濃の器種・釉薬を模倣する傾向が見られる。分布域の中心は、西は金沢市から東は上越市までである。

Ⅱ期：（17世紀前葉～中頃） 製品には碗、皿がある。皿は肥前お皿を模倣したと考えられる。分布域の中心は、1期同様西は金沢市から東は上越市までである。

Ⅲ期（17世紀後半～18世紀前半） この時期の資料はほとんど知られていない。製品には碗、皿がある。これまでの調査でもこの時期の出土量は減り、肥前に取って代わられるようである。分布域は県内中心となり18世紀になると県外ではほとんど見られなくなる。

## 水中遺跡

平成7年5月に石川県舳倉島沖から黒部漁港所属の漁船により4枚の完形品の染付皿が引き揚げられた。1680年代のもので直径約35cmを計る。現在、黒部市美術で管理保管されている。



近世陶磁器出土割合一覽

遺構	肥前陶磁器時期区分								
	I	II	III	IV	V	不明			
梅原胡摩堂遺跡	肥前陶器	276	33.7%	124	72	0	79	8	1
	肥前磁器	157	19.0%	41.6%	25.9%	0.0%	26.7%	2.9%	6.4%
	瀬戸・美濃	37	4.3%	0	0	14	7	57	78
	越中瀬戸	184	22.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	169	20.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	合計	823	100.0%						
富山城跡	肥前陶器	46	17.9%	1	14	10	18	0	2
	肥前磁器	115	41.5%	2.1%	20.2%	20.0%	23.3%	0.0%	14.0%
	瀬戸・美濃	4	1.5%	0	0	0	0	0	0
	越中瀬戸	43	15.6%	0	0	0	0	0	0
	その他	65	23.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	合計	275	100.0%						
富山城跡	肥前陶器	20	22.3%	0	0	3	7	3	0
	肥前磁器	41	46.1%	0.0%	15.0%	35.0%	15.0%	0.0%	35.0%
	瀬戸・美濃	2	2.2%	0	0	0	0	0	0
	越中瀬戸	7	7.9%	0	0	0	0	0	0
	その他	18	20.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	合計	89	100.0%						
富山城跡	肥前陶器	20	22.3%	0	0	3	7	3	0
	肥前磁器	41	46.1%	0.0%	15.0%	35.0%	15.0%	0.0%	35.0%
	瀬戸・美濃	2	2.2%	0	0	0	0	0	0
	越中瀬戸	7	7.9%	0	0	0	0	0	0
	その他	18	20.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	合計	89	100.0%						
富山城跡	肥前陶器	64	23.4%	0	12	9	34	5	4
	肥前磁器	103	37.6%	0.0%	14.8%	14.3%	33.3%	7.8%	6.5%
	瀬戸・美濃	8	2.9%	0	0	0	0	0	0
	越中瀬戸	48	17.2%	0	0	0	0	0	0
	その他	50	18.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	合計	274	100.0%						
北城跡	肥前陶器	52	18.1%	0	0	11	17	3	21
	肥前磁器	83	28.9%	0.0%	0.0%	21.5%	23.7%	5.8%	40.5%
	瀬戸・美濃	9	3.1%	0	0	0	0	0	0
	越中瀬戸	115	40.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	28	9.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	合計	287	100.0%						
北城跡	肥前陶器	54	21.9%	0	1	6	33	3	11
	肥前磁器	57	22.7%	0.0%	1.9%	11.1%	41.1%	5.8%	39.4%
	瀬戸・美濃	24	9.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	越中瀬戸	100	39.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	その他	16	6.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	合計	251	100.0%						

梅原胡摩堂遺跡一括資料一覽

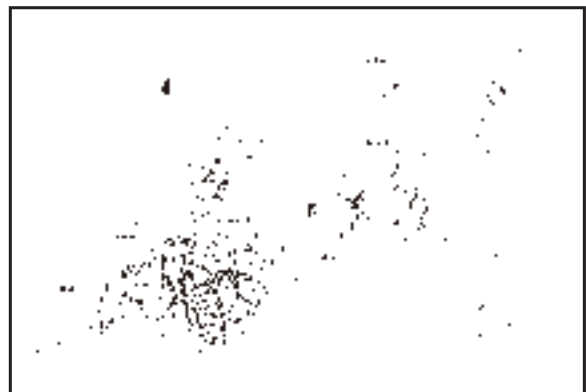
遺構	No.	時期	名称	遺物	No.	備考
17番紀前中	SB3830			中国土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				瀬戸・美濃	15	16
				中国土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
17番紀中	SD424			土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				17番紀中	SB37	
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
17番紀中	SB379					
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				17番紀中	SK104	
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
土師器	171	172				
17番紀中	SK3885					
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172
				土師器	171	172



富山城跡出土遺物



遺跡名	所在地	遺跡の性格	概要
梅原胡摩堂遺跡	南砺市梅原	中核的農村寺院	砺波平野の南西部に位置する南北1kmのわたる中近世の集落遺跡。調査区には近世から昭和初期まで続いた旧以速寺跡が含まれる
善徳寺前遺跡	南砺市城端	門前町	旧城端町は真宗大谷派城端別院善徳寺を中心に広がる門前町。16世紀末から現在まで続く
江尻遺跡	高岡市江尻	一般農村	近世から近代の区画溝を伴った屋敷跡を19棟確認。中心時期は16世紀末から17世紀、18世紀、18世紀後半から19世紀である
下老子笹川遺跡	高岡市下老子笹川	一般農村	17世紀から19世紀の農村遺跡
余川寺ヶ谷内遺跡	氷見市余川	一般農村	18世紀から19世紀の農村遺跡
富山藩城下町	富山市総曲輪	城下町	富山城下町絵図から北側は上・中級武家屋敷、南側は町屋敷に相当
出遺跡	魚津市出	一般農村	近世遺物のほとんどが包含層からの出土で16世紀末から近現代までにわたる
北堀切遺跡	黒部市北堀切	中核的農村	近世である上層面からは17世紀後半から18世紀後半にかけての区画溝を伴う掘立柱建物を確認
越中瀬戸窯	立山町瀬戸	窯跡	16世紀後半に、尾張国瀬戸より陶器工人を招来し開窯した施釉陶器である。本格的な施釉窯としては、日本海側では最古と言われる



越中瀬戸の富山県外出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺跡の性格	概要
梅原胡摩堂遺跡	南砺市梅原	中核的農村寺院	砺波平野の南西部に位置する南北1kmのわたる中近世の集落遺跡。調査区には近世から昭和初期まで続いた旧以速寺跡が含まれる
善徳寺前遺跡	南砺市城端	門前町	旧城端町は真宗大谷派城端別院善徳寺を中心に広がる門前町。16世紀末から現在まで続く
江尻遺跡	高岡市江尻	一般農村	近世から近代の区画溝を伴った屋敷跡を19棟確認。中心時期は16世紀末から17世紀、18世紀、18世紀後半から19世紀である
下老子笹川遺跡	高岡市下老子笹川	一般農村	17世紀から19世紀の農村遺跡
余川寺ヶ谷内遺跡	氷見市余川	一般農村	18世紀から19世紀の農村遺跡
富山藩城下町	富山市総曲輪	城下町	富山城下町絵図から北側は上・中級武家屋敷、南側は町屋敷に相当
出遺跡	魚津市出	一般農村	近世遺物のほとんどが包含層からの出土で16世紀末から近現代までにわたる
北堀切遺跡	黒部市北堀切	中核的農村	近世である上層面からは17世紀後半から18世紀後半にかけての区画溝を伴う掘立柱建物を確認
越中瀬戸窯	立山町瀬戸	窯跡	16世紀後半に、尾張国瀬戸より陶器工人を招来し開窯した施釉陶器である。本格的な施釉窯としては、日本海側では最古と言われる

# 新潟県における肥前陶磁器の流通

伊藤 啓雄（柏崎市教育委員会）

新潟県における肥前陶磁器の流通については、安藤正美氏〔安藤2001〕・相羽重徳氏〔相羽2004〕・渡邊ますみ氏〔渡邊2009〕等による研究がなされており、本報告もこの3氏による成果をもとにしている。報告の概要は「発表要旨・資料集」を参照していただくこととし、ここでは紙幅の関係から、時期は討論で中心となった17世紀前半（Ⅰ～Ⅱ期）、地域は資料が比較的充実している頸城地域（上越地域）、器種は碗・皿についてまとめることとしたい。なお、時期区分は『九州陶磁の編年』〔九州近世陶磁学会2000〕による。

**器種組成の変遷** 遺構一括資料に含まれる肥前陶磁器の主要な器種を指標とし、それぞれの段階における状況をまとめる。

至徳寺遺跡西堀上層・同南堀上層・木田遺跡 SE18・同 SD282・高田城跡 SX010の碗・皿は、中国・瀬戸美濃・肥前・越中瀬戸によって構成される。肥前はⅠ－Ⅱ期の胎土目積みされた皿である。他もほぼ併行する時期の製品であるため、Ⅰ－Ⅱ期の段階で肥前陶器が流通していたのは確実であろう。Ⅰ－Ⅰ期に生産された藁灰釉の碗・皿も出土しているが、いずれもⅠ－Ⅱ期以降の製品とともに出土しているため、Ⅰ－Ⅰ期段階の流通は明らかではない。

横曽根遺跡 SK37・木田遺跡 SE288・同 SE200の碗・皿には、Ⅱ期の砂目積みあるいは溝縁の皿（陶器）がみられる。この段階になると、碗・皿は肥前陶器によって大半を占められるようになる。高台無釉の碗（磁器）などを指標とすれば、さらに時期の細分が可能であるが、今のところ一括資料においては確認されていない。また、陶器は定量みられるものの、磁器の共伴関係を確認できるのは横曽根遺跡 SK37などに限られる。肥前磁器が比較的遠隔地へ流通するのはⅡ－Ⅰ期後半（1620～30年代）以降とされるので〔野上2000〕、新潟県もその範疇にあると考えられる。

**肥前陶磁器の流通** 以上のような肥前陶磁器は、日本海の手運によって生産地からもたらされたと考えられる。文献資料からは、1588年（天正16）に摂津平野商人の東末吉家・西末吉家がそれぞれ最上義光・上杉景勝から分国内の自由通行を認められたこと、1593年（文禄2）に末吉家が越前北袋銀山の採掘権を得たこと、1592年（天正20）の朝鮮出兵の際に景勝が肥前名護屋に米を輸送していること、1628年（寛永5）に小倉藩が出羽庄内に買米に出向いていることから、16世紀末には北東日本海と北九州が結びつくようになったと考えられている〔矢田2002〕。

越後での流通については、幕府によって整備された街道のほか、河川による運輸もその担い手となった。頸城地域では関川とその支流で川舟が活動しており、河口の今町がそれを特権的に独占していた。高田藩では、17世紀前～中葉から城下町のほかに舟運についても整備している〔原2004〕。

新潟県では、Ⅰ－Ⅱ期から肥前陶磁器の流通を確認することができた。海上輸送されてきた製品が河川などによって内陸部まで普及することができるようになったと考えられる。

## 【参考文献】

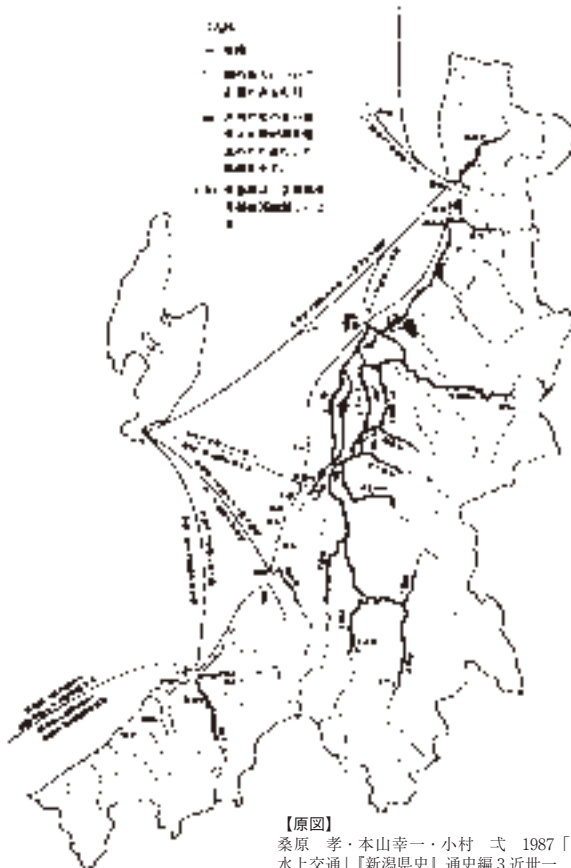
- 相羽重徳 2004 「頸城平野における近世陶磁器の様相」（新潟県考古学談話会発表資料）  
安藤正美 2001 「新潟県の主な近世遺跡」『国内出土の肥前陶磁－東日本の流通をさぐる－』（第11回九州近世陶磁学会資料）九州近世陶磁学会  
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』  
野上建紀 2000 「碗・小坏・皿・紅皿・紅猪口」九州近世陶磁学会2000に所収  
原 直史 2004 「川の流れて沿って」上越市史編さん委員会編『上越市史』通史編4 近世二 上越市  
矢田俊文 2002 「北東日本海経済圏の解体－北東日本海域－」『日本中世戦国期の地域と民衆』清文堂出版  
渡邊ますみ 2009 「新潟県出土の近世播鉢について－近世前半（16世紀末～18世紀）を中心とした流通の様相－」『新潟考古』第20号 新潟県考古学会

- 1 村上城跡 (含:ニノ町地区など)
- 2 天王前遺跡
- 3 金曲遺跡
- 4 高田遺跡
- 5 窪田遺跡
- 6 下町・坊城遺跡
- 7 新発田城跡
- 8 正尺A遺跡
- 9 笹山前遺跡
- 10 近世新潟町跡
- 11 細池遺跡
- 12 江内遺跡
- 13 榎表遺跡
- 14 坂井遺跡
- 15 加坪川遺跡
- 16 元屋敷遺跡
- 17 奈良崎遺跡
- 18 山田郷内遺跡
- 19 柏崎町遺跡
- 20 新保遺跡
- 21 水久保遺跡
- 22 四ツ屋遺跡
- 23 高畑遺跡



- 24 木田遺跡
- 25 高田城下鍋屋町遺跡
- 26 高田城跡
- 27 蟹沢遺跡
- 28 海道遺跡
- 29 関川開所跡
- 30 岩倉遺跡
- 31 糸魚川鉄砲町遺跡
- 32 寺地遺跡
- A 至徳寺遺跡
- B 福島城跡
- C 横曽根遺跡

【原図】  
渡邊ますみ 2009「新潟県出土の近世播鉢について—近世前半(16世紀末~18世紀)を中心とした流通の様相—」『新潟考古』第20号 新潟県考古学会



【原図】  
桑原 孝・本山幸一・小村 式 1987「陸上交通と水上交通」『新潟県史』通史編3 近世一 新潟県

第1図 新潟県におけるおもな近世遺跡の位置図

第2図 新潟県における近世初期の海上・河川交通路

遺跡	遺構	碗						皿			碗皿類報告点数					播鉢	その他		肥前時期区分	報告書等	備考	
		中瀬戸美濃	瀬戸唐津	肥前(陶)	肥前(磁)	高台無釉	初期伊万里	中瀬戸美濃	胎土	肥前(陶)	肥前(磁)	蛇の目高台	中瀬戸美濃	肥前陶器	肥前磁器		その他	合計				肥前
至徳寺跡	北堀					○						1				1				I-2	1	
至徳寺跡	西堀上層			○			○	○	○			1	1	8		10		灰釉鉄絵片口鉢	青磁瓶類・珠洲瓶類	I-2	1	
至徳寺跡	南堀上層			○			○	○				2	8		10					I-2	1	
福島城跡													1		1				土師器皿(ロクロ)	I-2	1	1607年完成 1614年廃城
木田遺跡	SE18							○					2		2	肥前				I-2	1・2	木田①
木田遺跡	SD282							○					2		2					I-2	2	木田①
新保遺跡	98SE650							○					4	3	7					I-2	3	
高田城跡	SX101	○					○	○				5	2	1	8	備前		土師器皿(手づくね・ロクロ)	I-2	1	高田城様相① 青花には涼窓を含む	
横曽根遺跡	SK37							○					4	1	5		陶器壺(同心円文)			II	1	
木田遺跡	SE288							○					3		3	瀬戸美濃	鉄釉壺・薬灰釉瓶			II	1・2	木田②
木田遺跡	SE200							○					5		5	肥前(ロクロ)	陶器壺・陶器天目台			II	2	木田②
子安遺跡	SE20581							○	○				6		6					II	4	
子安遺跡	SE20422							○					1		1	肥前(ロクロ・口縁鉄釉)	磁器瓶			II	4	

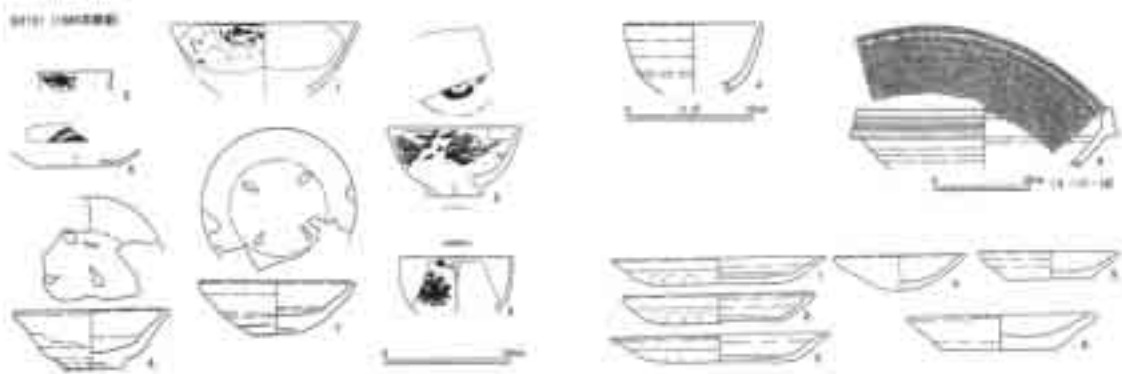
報告書等

- 1 上越市史専門委員会考古部会編2003『考古-中・近世資料-』(上越市史叢書8) 上越市
- 2 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書VI 木田遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第105集)
- 3 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『国営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 新保遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第103集)
- 4 上越市教育委員会 2009『子安遺跡』

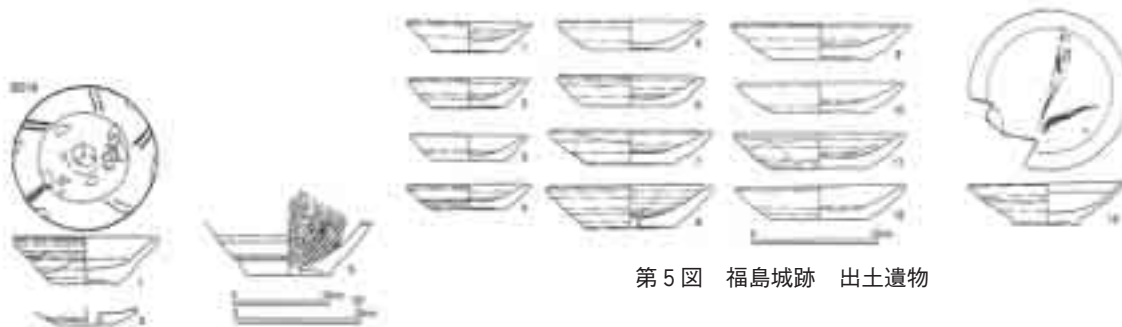
第1表 17世紀前半における新潟県頸城地域のおもな近世遺構の器種構成表



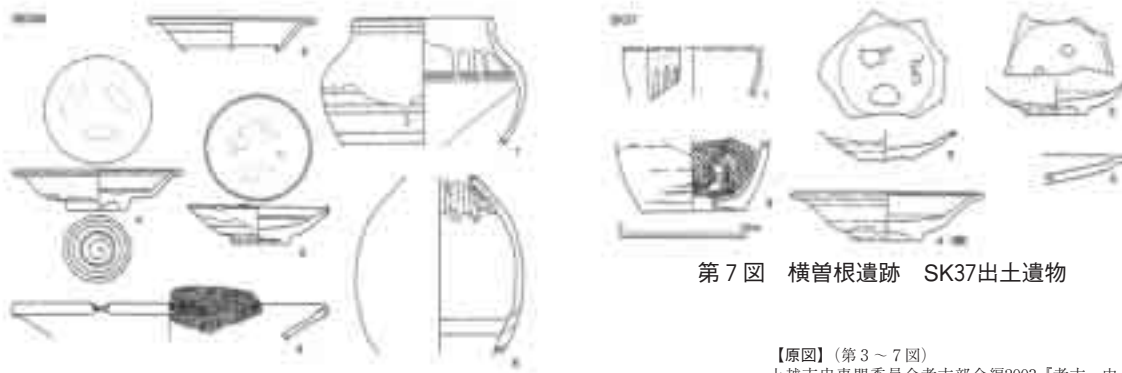
第3図 至徳寺遺跡南堀上層・西堀上層・北堀出土遺物



第4図 高田城跡 SX101出土遺物



第5図 福島城跡 出土遺物



第7図 横曽根遺跡 SK37出土遺物

第6図 木田遺跡 SE18・SE288出土遺物

【原図】(第3～7図)  
上越市史専門委員会考古部会編2003『考古一中・  
近世資料』(上越市史叢書8) 上越市

## 東北日本海域の近世陶磁器

長谷川 潤一（由利本荘市教育委員会）

東北地方日本海域の青森・秋田・山形の3県では大凡90ヶ所の遺跡から発掘調査によって肥前陶磁器の出土が確認され、いずれの県でも中世城館、近世城郭と城下が代表的な消費地遺跡といえる。このうち秋田県の代表的消費地である秋田市久保田城下の遺跡（藩校明德館跡・東根小屋町遺跡・古川堀反町遺跡）と由利本荘市本荘城跡の事例を中心に3県での事例を概観する。

秋田県では実年代が明確な整地層や遺構からの遺物出土例がほとんどなく、陶磁器の生産地側における編年研究を基準にして、時期ごとのおおよその様相や流通・消費状況を把握している現状にある。

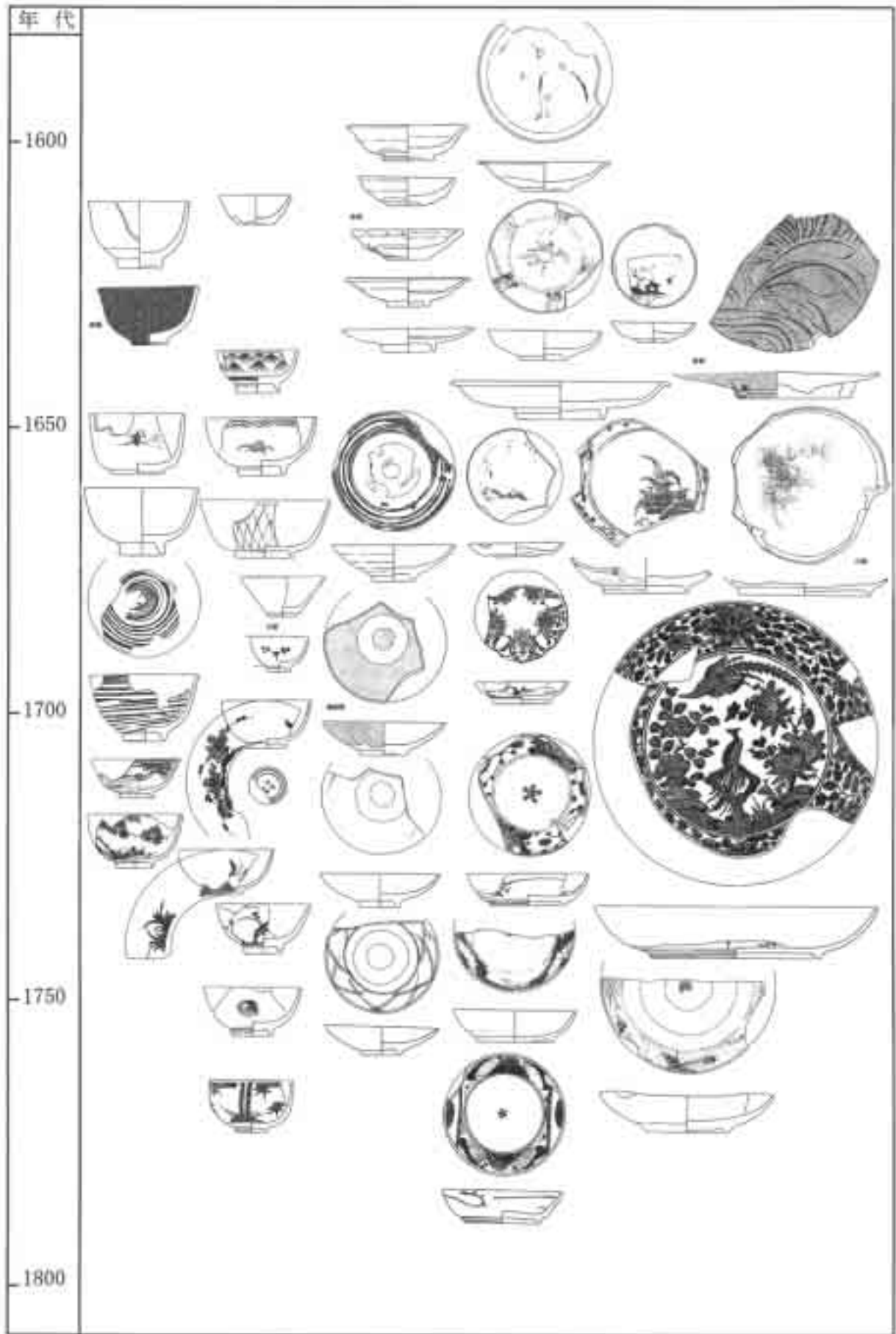
肥前で磁器が生産される以前の陶器胎土目積み段階である16世紀後葉から1600年代の段階（肥前Ⅰ期）は、肥前陶磁出土遺跡の半数以下に留まる。16世紀から美濃大窯末期の志野流通期までは瀬戸・美濃や貿易陶磁の割合が高いが、3県で数遺跡ずつ岸岳系陶器が出土し、早い時点から肥前陶器が入り始めている可能性がある。実質的に1600年代に廃絶する城館や、1607年頃に町割りが始まった久保田城下では瀬戸美濃製品が少ない割に肥前Ⅰ－Ⅱ期の陶器が一定量出土しており、1600年代後半にかけて主体的になっていく。絵唐津をはじめとした皿、碗の他に鉢や瓶も確認される。

1610年代から1650年代（肥前Ⅱ期）では、遺跡数、出土量とも増加し、城下の整備に伴い流通量が増大し、陶磁器の大部分を肥前が占める。代表的な陶器溝縁皿は久保田城下や本荘城に六郷氏が入部した1623年以降の段階で多量に出土し、平底が多いことが特徴で、鉄釉平底は秋田県が全国最多とされる。肥前Ⅰ期からⅡ期にかけては数量が少ないものの甕や播鉢等の雑器も出土している。磁器は久保田城下遺跡で染付、色絵とも最初期とみられる製品から出土しており、食膳具の中で碗の比率が増してくる。波佐見青磁大皿、砂目積磁器、高台無釉碗もみられ、久保田城下では質量とも豊富である。

1650年代から1690年代（肥前Ⅲ期）では、遺跡数の増加が一旦止まる。碗皿では磁器が多数を占めるものの、久保田城下では刷毛目文碗皿、銅緑釉掛け分け皿、京焼風碗皿、呉器手碗が一定量みられ、久保田城下・本荘城とも刷毛目文鉢や二彩手甕も特徴的に出土する。京焼風は受容が限定的なのか山形県と久保田城下以外では分布の広がりがみられない。磁器は久保田城下で、Ⅲ期初め頃の古九谷ほか色絵の高級品がみられ、1670年代前後に顕著と指摘される。器種も多様で、碗皿以外では香炉や瓶類の量が増加してくる。

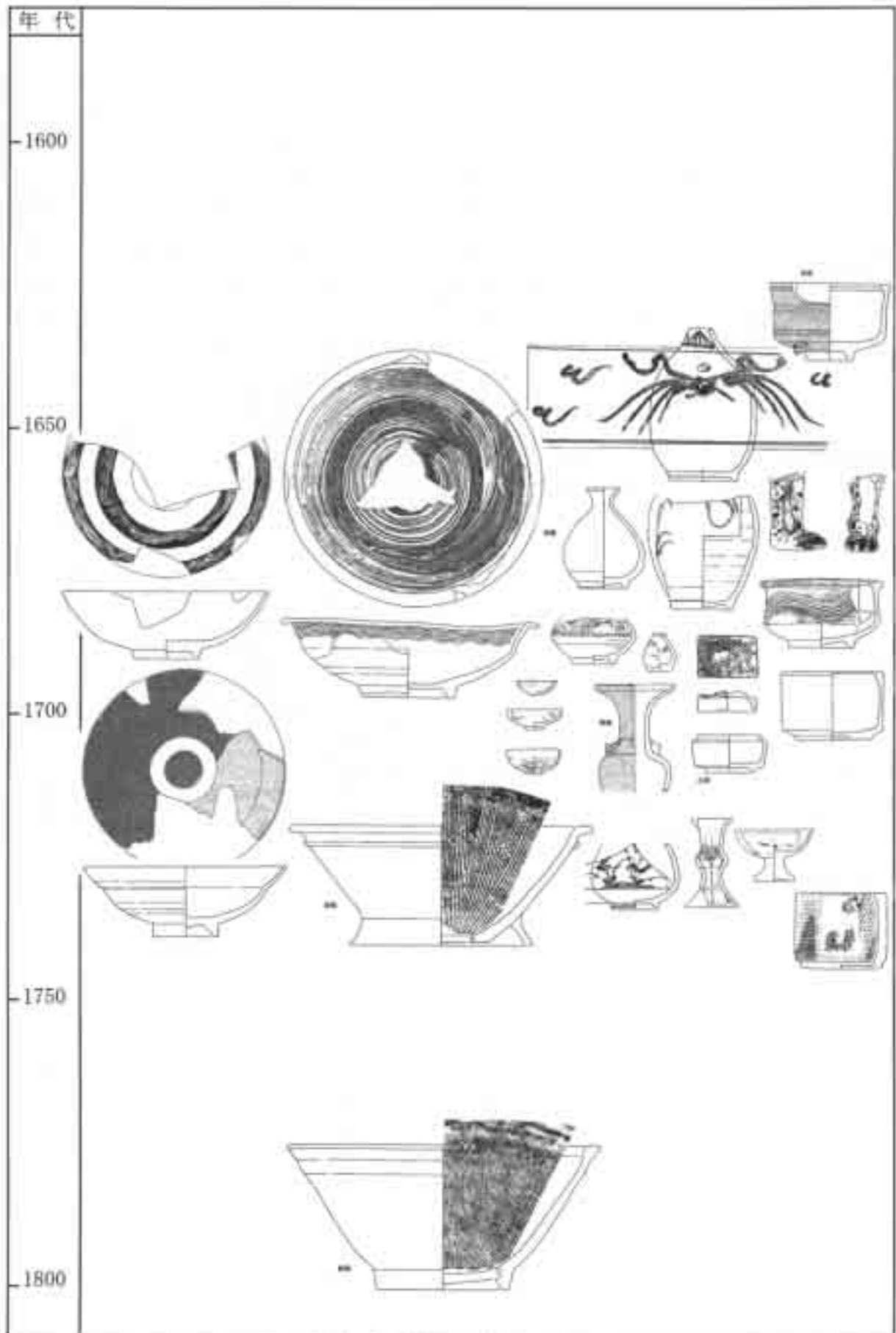
1690年代から1780年代（肥前Ⅳ期）では、遺跡数が大幅に増加し、江戸時代を通じて最も多くなっている。都市部以外でも集落や周辺域で普及が進んでいる様相を示し、おおよそ18世紀半ば頃までに流通・消費の画期が認められ、久保田城下・本荘城とも出土量のピークになると考えられる。この段階でも在地窯が未成立ということもあって、陶磁器のほとんどを肥前陶磁が占める。陶器は刷毛目文、二彩手、三島手の鉢や播鉢の比率が高く、食膳具は18世紀前半を主体に刷毛目文碗皿、内野山窯の銅緑釉皿等が若干の割合で出土するものの磁器の割合が卓越するようになり、見込みコンニャク印判の碗皿、「くらわんか手」が各地で多量に出土している。本荘城三の丸の18世紀前～中葉の藩主居館・政庁域の「御膳所」付近の多数の廃棄土坑では、陶器播鉢とくらわんか手碗皿で全体の3／4余りを占め、嗜好性がない一括購入・大量消費を示している。

地域内での流通経路としては、北前船寄港地、特に酒田、土崎、能代、本荘など大河川河口部の湊町から基本的に河川ルートで内陸部に至ったと考えられる。



藩校明德館跡の肥前陶磁器（1）





藩校明德館跡の肥前陶磁器（2）

## 討論と展望

中泉 絵美子・藤田 邦雄（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

平成22年10月29日の環日本海交流史研究集会では、近世肥前陶磁の産地報告に続き、日本海沿岸各地の消費地様相が南から順に発表された。

今回は会場の参加者にアンケート用紙を配付し、①陶磁器を「カラツ」・「セトモノ」どちらで呼ぶか、②陶磁器食器の使用期間、③陶磁器購入時のポイントを聞いた。集計の結果、特に①の呼び方に関しては、回答者の約7割が「セトモノ」派であり、「カラツ」圏として知られる石川県の過去の聞き取り調査とは異なる結果となった。様々な要因はあるものの、現状の一面を示したものとして興味深い。



研究集会

翌日は、金沢城下町遺跡をはじめ県内各地から出土した遺構一括遺物を中心に資料見学会が行われ、それと共に肥前陶磁器の主要器種における出現期について各地域間で意見が交わされた。

肥前陶器の生産は1580年代にはじまり、文禄・慶長の役を経て1610年代には重ね焼きに従来の「胎土目」から「砂目」を使用ようになる。ただし、こうした年代観を消費地側で追認することは難しく、今回も肥前陶器の出現が確実に1600年以前に遡る資料群は確認できなかった。また、砂目積の溝縁皿と肥前磁器（初期伊万里）の共供事例は比較的多く認められたが、やはり年代的には1630年代以降の出現が一般的であり、生産年代よりも時期的に一段階下がる印象が持たれた。なお、砂目でも溝縁皿以前の製品には肥前磁器が伴わない事例がいくつかあり、両者間の出土様相に時間差が認められるが、それを生産地の状況で裏付けることはできなかったように思われる。

第1表は今回報告のあった各地域ごとに肥前主要器種の出現期を模式化して記入したものである。近年は近世遺跡の調査例が増加したとはいえ、年代のわかる一括資料は少なく、築城時期や火災層等からの年代観をもとに事務局で作成したものである。なお、参考資料として大坂の事例を加えた。現段階では、生産地と消費地年代にはそれなりのタイムラグが認められるが、使用期間の問題も含め、今後こうした課題を取り扱う中で近世陶磁器の生産と流通の検討を深めていきたいと考えている。



資料見学会



意見交換会

第1表 肥前陶磁器主要器種の出現期

	1550	1600	1650	1700	1750	1800
	報告者	文禄・慶長の役(1592~1598)				
九州(窯)	中野	● 1580年代	▲ 1610年代 ○ 1610年代	■ 第3四半期 △ 1640年代	□ 1680年代	
九州	佐藤		● ▲ 1623年下限 ○ △ 1620~30年代	■		
山陰	佐伯		● (松江城) 1607年上限			
福井	河村		● (福井城) 1601年頃?	▲ ○ △ 1636年		
石川	庄田		● ▲ (溝縁皿なし) 1623下限 ○ ▲ (溝縁皿) 1631下限	△ 1640~50年代	■ 1677年 □ 1690年下限	
	加藤		● 1620頃 ▲ 1632年上限			
九谷古窯				◎ 1655年		
富山	高梨					
越中瀬戸		◎ 1582年以前				
新潟	伊藤		● (新発田城) 1602~1610年代頃 ▲ 1610~30年代頃 ○ 1630年代上限	△ 1650~60年代		
	長谷川		● (本荘城)			
東北						
大坂	(参考)	① 少量	② 定量	③ 溝縁皿なし	④	
		① 豊臣前期 1580~1598 ② 豊臣後期 1598~1615 ③ 徳川初期1 1615~1622 ④ 徳川初期2 1622~17C前半				● 肥前陶器 (絵唐津・胎土目) ○ 肥前磁器 ▲ 肥前陶器 (砂目) △ 高台無軸碗 ■ 青緑釉皿 □ コンニャク印判

---

---

石川県埋蔵文化財情報

第25号

発行日 2011(平成23)年5月24日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1  
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>  
E-mail address [mail@ishikawa-maibun.or.jp](mailto:mail@ishikawa-maibun.or.jp)

---

---

印刷 株式会社 橋本確文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター